Ⅰ 大学入学共通テスト試行調査(2017 年 11 月)の検討—世界史 B

問題構成

2017 年度のプレテストの世界史 B の問題構成は第 1 表のようになっている。各設問のテーマ，設問の要求は私の解釈である。評価の欄は私の判断で，難・標準・易は難易度を表し，良は良問，悪は悪問，疑は出題の妥当性に疑問がある設問，ミスは出題ミスまたはミスの可能性のある設問を表している。「正答率」は入試センター発表の『設問別のねらい及び正答率』による。大問の番号や中問のアルファベットがイタリック体になっているのは，アクティブ・ラーニングが設定された設問である。

第 1 表 プレテスト世界史 B の問題構成と正答率

大問	中問	小問	小問テーマ	出題形式	設問の要求	正答率	評価
1	資料から過去の歴史を知る						
	A	金印と1世紀の東アジア		史料と説明文			
		問1	東アジアの状況	正文選択	年代の暗記	32.2	疑
		問2	冊封関係	空欄補充	古代の日中関係	63.2	易
		問3	倭と委の読み方	誤文選択	委と倭の違い	72.7	疑
	B	クローヴィスの改宗					
		問4	歴史十巻の引用文の主旨	正文選択	資料の読解	66.6	ミス
		問5	引用文の主題を表す図版	図版選択	資料と図版の照合	75.7	良
		問6	クローヴィスとコンスタンティヌスの類似性	空欄補充	人名の暗記	49.1	悪
2	人の移動や人口の増減						
	A	人の移動や移住の歴史		地図と統計表			
		問1	トルコ系王朝の活動(地図)	誤文選択	史実の暗記	58.7	疑
		問2	16世紀～20世紀前半の人口移動(地図)	誤文選択(複雑)	史実の暗記	25.9	疑
		問3	白豪主義の撤廃に至った要因	正文選択	年代の暗記	18.9	悪
	B	紀元前から20世紀末までの中国の人口動態		人口動態のグラフ			
		問4	グラフ中の2つの時期の人口増加の要因	正文選択	年代の暗記	54.1	悪
		問5	157年～と755年～の人口減少の理由	正文選択	年代の暗記	48.1	悪
		問6	1566～1661年の他地域での人口減少	事項選択	年代の暗記	49.2	悪
3	民衆反乱						
	A	ロシアのプガチョフの乱		リード文			
		問1	トルコ系王朝の活動(地図)	正文選択(組合せ)	史実と年代の暗記	64.2	易
		問2	民衆反乱の絵画の時系列	図版の並べ替え	年代の暗記	43.9	疑
		問3	ロマン主義	正文選択	ロマン主義の特徴	52.5	悪
	B	19世紀アジア・アフリカの民衆反乱					
		問4	a第2次日韓協約，bイランの保護国化	正誤判断(組合せ)	史実の暗記	23.6	悪
		問5	マフディの乱？⇒スーダン⇒地図	地図上の地域選択	資料読解と地理	47.0	悪
		問6	民衆反乱の理由	空欄補充(文)	3つの反乱の共通性	17.0	ミス
4	世界史における家族や家庭						
	A	前近代の君主や最高指導者の地位の継承		系図と会話文			
		問1	後継者はア息子，イ男で子孫以外もある	空欄補充(組合せ)	系図の読み取り	73.6	悪
		問2	継承権における女性の役割(中と英)	正誤判断(組合せ)	史実の暗記	54.3	悪
		問3	カリフの継承とイスラム教の宗派	正誤判断(組合せ)	史実の暗記	46.1	疑

	B	19世紀のイギリスの家庭		会話文と統計表			
		問4	ジャガイモを特定しその説明	空欄補充(組合せ)	資料読解と史実	65.8	良
		問5	イギリスへの砂糖輸入のルート	地図上のルート選択	史実の暗記	29.9	悪
		問6	ビクトリア朝時代の社会と家族観(絵画)	正誤判断(組合せ)	史実の暗記	52.2	疑
5	第一次世界大戦						
	A	第一次世界大戦中のベルリン		史料と会話文			
		問1	1914年の皇帝の演説とキール軍港反乱	空欄補充(組合せ)	史実の暗記	49.6	易
		問2	第一次世界大戦後のヨーロッパ国境	地図の読み取り	地図の読解と史実	57.6	良
		問3	アメリカ社会	正誤判断(組合せ)	写真と史実の対比	77.6	易
	B	第一次世界大戦中の外交		史料			
		問4	(1)イギリスの外交資料の説明	正文選択	資料読解と史実	78.7	良易
			(2) (1)の解答と関係の深い史実	正文選択	史実の理解	43.0	易
		問5	ユダヤ教の説明	正文選択	ユダヤ教の知識	79.5	悪
6	近代オリンピックと世界史のつながり			参加者数のグラフ			
		問1	古代ギリシアのオリンピアの祭典	正文選択	史実の暗記	56.3	疑
		問2	ロサンゼルス大会の参加者が少ない理由		史実と推測能力	36.1	ミス
		問3	第二次世界大戦に関連する図版	説明付き図版選択	図版読解と史実	49.7	良
		問4	アメリカの人種差別問題(メキシコ大会)	正誤判断(組合せ)	史実と年代の暗記	71.4	易
		問5	モスクワ大会ボイコット:冷戦	正文選択	年代の暗記	61.5	易
		問6	先住民の歴史(リオ大会)	誤文選択	史実の暗記	56.6	疑

この問題構成でまず気になるのが，大問 1～4 の A と B は時代も国・地域も異なっているにもかかわらず，1 つの大問のなかの 2 つの中問として出題されていることである。現在の歴史科目の大学入試問題では，大問はある国・地域について時代や時期ごとの設問で構成するか，逆にある時代や時期における各国・地域の状況や国際関係についての設問で構成し,そのことを設問文やリード文で説明するのが,オーソドックスな問題構成である。これは，大問の設問文やリード文でテーマを提示することによって，受験生にこれから出題される国・地域，時代をイメージさせ，関連する史実に関する知識の記憶を引き出す一助とし，場合によっては解答のヒントを提供することが目的である。

世界史 B のプレテストでは，このようなオーソドックスな手法がとられていない。例えば第 1 問の設問文は，「私たちは，文献や遺物，遺跡などから過去の歴史を知ることができる。歴史資料に関する次の文章 A・B を読み，下の問い(問 1～6)に答えよ」である。文章 A は，「エリさんは，1 世紀に中国からもたらされた金印について，パネルを用意して発表した」で，そのあとに金印の写真や『後漢書』からの引用文が提示されている。文章 B は，「次の文章は，6 世紀のトゥール司教グレゴリウスが著した『歴史十巻』の中の一節である」となっていて，その後に約 700 字の引用文が提示されている。

A は「歴史資料に関する」文章であるが，B は歴史資料そのものであるという不統一性の是非は問わないとしても，第 2 問以降のすべての大問が，資料や統計，図版などを提示した問題で，第 1 問だけが歴史資料を材料にした問題というわけではない。したがって，

第 1 問の設問文は，大問のテーマを提示しているわけではなく，受験生が問題に解答するための一助という目的からすれば，無意味なものとなっている。

第 2 問の設問文「世界史における人の移動や人口の増減について述べた次の文章 A・B を読み，下の問い(問 1～6)に答えよ」は，「人の移動」と「人口の増減」が並列されているだけで，ほとんど無内容である。この設問文がそれなりの意味をもつとすれば，例えば「ゲルマン民族の大移動」のように，ある地域の「人口の増加」が一つの要因となって他の地域への大規模な「人の移動」をもたらし，それが領土の争奪や戦争の要因となったという史実を A と B で出題する場合であろう。

しかし，A の文章は「あるクラスの世界史の授業で，人の移動や移住の歴史について班別学習を行った」という 1 行だけである。そのすぐ後から始まる 3 つの小問も，第 1 表の問題構成で明らかなように，それぞれが無関係な内容で，「班別学習」という設定も出題内容とは無関係である。B の文章は，紀元前 4 世紀から 20 世紀末までの中国の人口の推計値のグラフを出題の材料とすることを説明したものである。B の 3 つの小問の出題内容は A とは無関係で，しかも問 6 は中国とも関係がなく，時代も違う他地域の史実についての設問である。

第 3 問の設問文「世界史上の民衆反乱について述べた次の文章 A･B を読み，下の問い(問 1～6)に答えよ」については，A の文章はプガチョフの乱についてのオーソドックスなリード文であるから，設問文として妥当である。B の文章は，「民衆反乱やその指導者に関する」3 つの資料を提示することを説明したもので，「民衆反乱について述べた」文章ではないが，これは許容範囲としよう。

第 4 問の設問文は，「世界史における家族や家庭について述べた次の文章 A･B を読み，下の問い(問 1～6)に答えよ」で，A は前近代の君主等の継承についての設問で，B はイギリスの労働者の生活状態，砂糖の輸入ルート，ヴィクトリア朝時代の社会についての設問である。したがって，「世界史における家族や家庭について述べた」は，受験生に第 4 問全体のテーマを説明しているわけでもなく，設問文として無意味である。

第 5 問の設問文は「第一次世界大戦について述べた次の文章 A・B を読み，下の問い(問 1～6)に答えよ」で，A，B とも出題内容は第一次世界大戦関連といえるので，テーマの提示という意味では妥当な設問文である。しかし A の文章は，ベルリンの高校生 2 人が歴史の授業で文書館を訪れたという設定を説明したもので，「第一次世界大戦について述べた」ものではない。また，この設定は出題内容とも無関係で，直後に 3 つの資料を提示するこ

との説明でもない。B の文章は「次の資料は，いずれも第一次世界大戦の外交に関するものである」で，これも「第一次世界大戦について述べ」ているわけではない。

以上のように，時代も国・地域も異なる中問 A と B を，1 つの大問の中に組み込んで出題することに積極的意味はない。このような問題構成は大学入試センター試験(以下，センター試験)を踏襲したものであるが，プレテストは，「改革」の理念を具体化する共通テストの試行調査として，思考力・判断力等を問う出題を意図しているはずである。そうであれば，2020 年度からの共通テストでは，相互に関連性のない歴史的テーマの中問を，部分的・形式的な共通性だけで寄せ集めた大問という問題構成はやめるべきだろう。現状の 6 つの大問を解体し，各小問を上述の国・地域別，時代別といったオーソドックスなものに再構成した方が，入試問題として適切である。

センター試験にはみられなかったプレテストの特徴として，高大接続改革(以下，「改革」)の一環として，「学力の 3 要素」のうちの，思考力・判断力を評価する意図が読み取れる設問が多くなっている。また「班別学習」などの授業を想定した設問は，「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」すなわちアクティブ・ラーニング(以下，AL)の参考事例を提示しようとする意図であろう。

では，その意図は成功しているのか。また，各設問の内容自体に問題点はないのか。以下，各設問の入試問題としての妥当性を検討していく。妥当性に問題点がある場合には，可能な限りで，史実の理解に基づいく思考力・判断力を問うための修正案も提示する。

第 1 問　「資料から歴史を知る」をテーマとする設問

第 1 問の設問文は，「私たちは，文献や遺物，遺跡などから過去の歴史を知ることができる。歴史資料に関する次の文章 A・B を読み，下の問い(問 1～6)に答えよ」である。

A「金印と 1 世紀の東アジア」についての設問

文章 A は，「エリさんは，1 世紀に中国からもたらされた金印について，パネルを用意して発表した」という設定の説明の後，金印の写真や『後漢書』からの引用，「エリさん」の解説と思われる文章，「エリさん」に対する質問と回答の会話文がある。これらを資料として問 1～問 3 が出題されている。

問 1　下線部①は，金印がもたらされた当時の東アジアの状況を反映していると考えられる。その状況を述べた文として適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

下線部①とは，「エリさん」の解説文のうち，「『後漢書』は楽浪郡からの距離や方角によって倭人の居住地の位置を示している」である。選択肢のレファレンスは，①が「当時，倭の諸国が中国に往来するには，朝鮮半島を経由することが多かった」，②が光武帝が楽浪郡を設置した，③が「当時」の倭国は百済と結んで朝鮮半島に出兵した，④が「当時」の倭人の活動は好太王碑に記されている，である。

【出題の妥当性】

①の朝鮮半島経由で日本と中国の往来があったことは，常識の部類であり，資料からも判断できる。その述語は「……多かった」で，多かったかどうかの基準が曖昧であるから，正誤判断のレファレンスにはならない。したがって，①は誤文ではないだろうと推測できる。

②の楽浪郡は紀元前 108 年に前漢の武帝が設置した郡で，朝鮮支配の一環である。③の百済は 4 世紀の建国で，倭国の出兵は 7 世紀，④の好太王も 4 世紀の人物であるから，3 つとも「金印がもたらされた当時」とは時代が違う。したがって①が正解となる。この設問は，これらの史実の年代の暗記を問うための出題である。

ただし，①が「朝鮮半島を経由することが多かった」という正誤判断をするには曖昧な表現であるのに対して，②は「楽浪郡を設置した」，③は「出兵するなどしていた」，④は「好太王碑に記されている」と，断定的な事実関係の文章となっていて，①と表現が極端に異なっている。この文章構造の対比から，史実の年代を知らなくても②～④は誤りと推測することが可能である。

なお，「倭の諸国が中国に往来する」という表現は日本語として正しくないから(「倭の諸国と中国との往来は」とすべきである)，これを根拠として①は誤文であるという判断も可能である。したがって，厳密にいえば，この設問は正解のない出題ミスである。

その他の問題点として，選択肢の①，③，④は「当時」から始まる文章となっているが，「当時」とはどれぐらいの期間を許容しているのか曖昧であり，正誤判断のためには不適切である。明確な正誤判断の基準を示すために，設問文に「後漢時代の東アジアの状況として」という表現を挿入し，選択肢の「当時」を削除すべきである。

この設問の正答率は 32.2%とかなり低いが，後漢時代の中国と日本および周辺諸国との関係について出題することは，基本的知識を問う問題として妥当である。正答率の低さは，「当時」という時期・時代を限定するには曖昧な表現が原因で正誤判断を誤った可能性がある。また，文章表現から①以外が誤りと推測できるという受験技術を知らない受験生が

多かったのかもしれない。受験技術の訓練を受けた受験生であれば正答率は高くなり，この設問が選抜機能をもたなかった可能性がある。

【修正案】

設問文を「後漢時代の東アジアの状況を述べた文としてもっとも適切なものを，次の①～④のうちから１つ選びなさい」のように修正すれば，下線部①を含む「エリさん」の解説文は不要となり，字数も削減できる。選択肢の②～④の内容はそのまま生かすとすれば，①を上記の下線部①の文章に入れ替えて述語を断定的なものに統一すれば，文章構造の違いはなくなり，史実についての知識を問う設問にすることができる。日中の往来が朝鮮半島経由であることについて，世界史の教科書すべてに明示的な記述があるわけではないが，②～④の誤りが明確なので正文選択問題として成立する。

問 2　文章中の空欄 ア に入れる文として適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

空欄 ア は「エリさん」の解説文中にあり，「倭奴国が光武帝に対して朝貢し……印と綬を賜ったことから， ア という関係があったことがわかる」である。選択肢は，①「貢物の代価として金と銀を支払う」，②「皇帝が外国の王を臣下として冊封する」，③「皇帝から属州の総督に任命される」，④「郡国制の中に倭の地域を取り込む」である。

【出題の妥当性】

倭奴国の朝貢に応えて光武帝が与えた金印に「国王」の文字が刻まれているのだから，両者の関係を「冊封」とした選択肢②が正解となる。中国と周辺諸国が「冊封」関係にあったことは，世界史および日本史の必須といえる基礎的知識であるから，出題は妥当である。プレテストの受験者層という母集団の性格を考慮すれば，正答率が 63.2%は難易度も妥当であろう。ただし，高偏差値の大学であれば正答率はかなり高くなり，この設問は選抜機能をもたない可能性がある。

問 3　下線部②の説について，どのような根拠が想定できるか。想定できる根拠として適当でないものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

下線部②とは，資料の質疑応答部分にあり，金印の国名が「委奴国」となっているのに，『後漢書』では「倭奴国」と文字が違う理由について，金印の「委奴国」は『三国志』の記述にある「伊都国」とする説の説明である。選択肢のレファレンスは，①書物が手書きだったために「文字が変わることがあった」，②「編者が文字を改めることがあった」，

③口頭で伝えられた国名が「異なる漢字で表記されることがあった」，④倭国は卑弥呼によって統一されていたから「倭の奴国という国名はありえない」である。

【出題の妥当性】

④の「倭国は卑弥呼によって統一されていた」は，邪馬台国がヤマト政権(従来は「大和朝廷」と表現されていたが，当時の政権は天皇制下の「朝廷」組織と異なり，また漢字の「大和」の表記は 8 世紀以降であることから，現在の教科書では使用されていない)の前身という説をとったとしても，後漢時代に倭国は統一されていなかったから，これが明確な誤りである。

しかし，この知識がなくても，①～③の述語がすべて「ことがあった」であるのに対して，④は「ありえない」と断定されているという文章構造から正誤判断することも可能である。「ことがあった」を誤りとするためには，例外なしに「なかった」と証明しなければならない。いわゆる「悪魔の照明」であり，問 1 の選択肢と同様に，文章構造の違いを読み取るという受験技術によって④が誤りと判断できる。正答率が 72.7%と高いのも当然であろう。高偏差値の大学では選抜機能はないだろう。

出題の意図は，1 つの仮説の根拠を考察し判断させることで，思考力・判断力を問うことにあると推測できるが，この誤文の作り方と文章構造では思考や判断なしに正解できるため，その意図の実現には成功していない。出題の意図を貫こうとすれば，質疑応答ではなく，「委」と「倭」の違いについての諸説をもとに討論形式の文章を読ませて，どちらが妥当かを解答させるという方法もありうる。その方が「改革」の趣旨に沿うが，諸説といっても仮説にすぎないから，問題として成立させるのはかなり難しい。

また，日本の古代史では「委奴国」と「倭奴国」の違いの解釈の他にも，邪馬台国の位置，ヤマト政権との関係など，多くの争点がある。質疑応答は 300 字近い分量であり，これだけの分量を受験生に読む負担を強いてまで，多くの争点のうちの 1 つについて出題する意味があるのか疑問が残る。

以上のように，この第 1 問 A は「エリさん」の発表，質疑応答という形式をとる必要はなく，『後漢書』東夷伝の引用を資料として提示するだけで問題は成立する。その方が，受験生が読まなければならない字数も大幅に削減でき，解答のために考える時間を増やすこともできるのである。

B「クローヴィスの改宗」についての設問

冒頭に，トゥール司教グレゴリウスの『歴史十巻』から，クローヴィスの改宗について

の約 700 字の引用文が提示されている。

問 4　この文章から読み取れる内容として適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

選択肢はすべて「クローヴィスは」で始まっていて，レファレンスは，①「ローマ皇帝の帝冠を受けた」，②「王妃を改宗させようとした」，③「神に対し，精神的な救いよりも現実的な力の強さを求めた」，④「レコンキスタの一環としてアラマン人と戦った」である。

【出題の妥当性】

正解は③とされている。①と②は引用文には書かれていない。④は「レコンキスタの一環として」という時代の異なる史実が含まれている。世界史というよりは，長文の読解という国語の問題の性格が強い設問であるが，その是非は問わないことにする。

出題者は，長文を読んでその意味を考えなければ解答できない設問にし，「改革」の理念をである思考力・判断力を問おうという意図があったと思われる。しかし，受験生にとって，選択肢を見てから引用文を読むのが受験技術の基本である。この技術を使えば，引用文を斜め読みしただけで①，②，④が誤文と判断できるから，その意図は成功していない。

この設問の難易度は低いが，正答率は 66.6%と 3 人に 1 人が誤答となっている。この原因の 1 つは，④の主述関係が「クローヴィスは……アラマン人と戦った」で，これ自体は正文であって，誤りは「レコンキスタの一環として」であるから，レコンキスタの知識が曖昧な受験生が正文と判断したのかもしれない。レコンキスタは，イベリア半島で 8 世紀から約 800 年にわたって行なわれた，キリスト教徒のイスラム勢力に対する国土回復運動である。

もう 1 つの理由として考えられるのは，正解とされる③の文章である。第 1 に「精神的な救いよりも」という部分は引用文からは読み取れない。第 2 に「神に対し……強さを求めた」という表現は，出題者の意図としては，引用文の「イエス=キリストよ……私を勝たせてくれるならば」というクローヴィスの発言を指すと思われる。

そうだとすれば，まず「イエス=キリスト」は「神」なのかという疑問が生じる。キリスト教では，イエスは「神の子」ではあっても，神そのものではないという解釈がある。この立場に立つと，クローヴィスは「神」に対して何かを求めたわけではないから，③は誤文の可能性がある。また，「神に対し……強さを求めた」は，神自体が「現実的な力の強さ」を持つように求めた，という意味にもとれる。したがって，③は誤文と解釈されう

るから，この設問は正解なしという出題ミスの可能性がある。正誤判断問題では，解釈によって判断が分かれる文章を選択肢としてはならないのである。

問 5　この文章の主題を描いている図版として適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

図版に描かれているのは，①火あぶり，②洗礼，③航海，④城攻めである。

【出題の妥当性】

引用文にはクローヴィスが洗礼を受けたことの記述があるから，②の図版が洗礼を描いていることを読み取れれば正解することは容易である。図版が表現しているものを読み取り，史実との整合性を判断させることは，「改革」の理念を具体化する出題として妥当である。その意味では良問といえるが，正答率が 75.7%とかなり高いので，高偏差値の大学では選抜能力をもたない可能性が高い。

問 6　文章中の空欄 [イ] に入れる人の名として適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

空欄 [イ] の人名特定のレファレンスとなるのは，クローヴィスが洗礼を受ける際に，「新しい [イ] として洗礼所に進み出た」という部分である。選択肢は，① サラディン(サラーフ=アッディーン)，② トマス=アクィナス，③ コンスタンティヌス，④ ディオクレティアヌス，である。

【出題の妥当性】

正解は③とされている。クローヴィスが洗礼を受けて，キリスト教アタナシウス派に改宗したことは教科書に記述があるが，新しい「コンスタンティヌス」として，ということは記述がなく難問である。①は 12 世紀のエジプトアイユーブ朝の創建者で，人名からもイスラム圏の人物と推測できる。②は 13 世紀の神学者で，教科書ではスコラ学を大成した人物と紹介されており，基礎的知識として人名を暗記しておくべき人物といえる。

したがって，普通に世界史を学習している受験生にとって，①と②は誤りと判断できるが，③と④のどちらかを選ぶのは難しい。この設問の正答率は 49.1%であるから，ほとんどの受験生にとって根拠なしの 2 択をせざるをえなかったのだろう。教科書に記述のない細かい知識の暗記を問う出題の意図は何なのだろうか。「改革」の理念とどう関係するのか，私には理解できない。

第 2 問 「人の移動や移住の歴史」をテーマとする設問

第 2 問の設問文は「世界史における人の移動や人口の増減について述べた次の文章 A・B を読み，下の問い(問 1～6)に答えよ」である。

A「人の移動や移住の歴史」についての設問

文章 A は，「あるクラスの世界史の授業で，人の移動や移住の歴史について班別学習を行った」で，「班別学習」という設定を述べただけの文章である。これがどうして「人の移動や人口の増減について述べた文章」なのか。設問文の直後にあるだけに，その無意味さが際立っている。また，「班別学習」という設定も，後述するように受験生の解答のためのヒントになっていないし，文科省の「改革」の理念である「学力の 3 要素」を多面的・総合的に評価することにも役立っていない。設問文も文章 A も不要である。

問 1　久志君の班では，次の地図を見ながら，トルコ系諸王朝の活動についてカードに記入した。その記述として誤っているものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

地図はユーラシア大陸を対象として，突厥からオスマン帝国までの 6 つの民族・国家の支配地域を 6 種類の線で囲み，トルコ系民族の進出方向を矢印で示したものである。このように説明しても，地図をイメージできないと思われるが，提示された地図自体がいくつもの線が重なっていて，判別が難しいものになっている。ただし，後述のように，地図を見なくても解答可能である。

選択肢は，①が 「セルジューク朝の下で，カイロが繁栄した」，②が「オスマン帝国は，ウィーン付近まで進攻した」，③が「トルコ系の勢力はモンゴル高原から西方に広がった」，④が「トルコ系の勢力は，インドにも進出した」である。

【出題の妥当性】

8 世紀以降，トルコ系民族がモンゴル高原地域から西アジア・中東地域に進出するとともにイスラム圏も拡大していったことや，オスマン帝国が北アフリカ，ヨーロッパ地域にも進出していったことを，地図上の位置関係とともに理解することは重要である。これらは，十字軍の遠征や現代の中東問題やパレスチナ問題，イスラム教原理主義と欧米キリスト教原理主義の対立などとも関連するので，世界史の問題として取り上げることは有意義である。問題はその意義をどのように設問に具体化するかである。

この設問の正解は①とされている。カイロはセルジューク朝の支配下に入っていないという史実を知っていれば，地図を見なくても解答できるのだが，この史実を知らなくても

解答は可能である。地図にはカイロの位置は示されていないが，カイロがどのあたりにあるかは受験生が当然知っておかなければならない知識であろう。したがって，地図からセルジューク朝の支配領域を読み取ることができれば，カイロは支配領域外であることがわかるから，①が誤文と判断できる。

出題者に，歴史的事実の暗記に頼らずに，地図を読み取る能力の重要性を示そうとする意図があるとすれば，問題として妥当性があるし，「改革」の理念を具体化しようとしたことは読み取れる。ただし，選択肢の正誤判断に必要なのは，セルジューク朝とオスマン帝国の支配領域，およびトルコ人の進出方向の矢印だけだから，それ以外の王朝の支配領域を描いて，読み取りにくい地図にする必要はない。

選択肢③と④も，同様に地図上に描かれた「トルコ人の進出方向」の矢印から正しいと判断できる。問題は②である。地図にはウィーンの位置も示されていないが，ウィーンがどのあたりにあるかは，受験生が知っていなければならない知識であろう。この知識があれば，地図に示されたオスマン帝国の支配領域には入っていないことは把握できる。そこで問題になるのが，「オスマン帝国は，ウィーン付近まで進攻した」という表現である。

地図上には，ウィーン方面へのトルコ人の進出方向を示す矢印は描かれていない。国語辞典によれば，「進攻」は「進んで敵を攻撃すること」とあり，「進出」は「勢力拡張・新分野開拓のために乗り出すこと」となっている。この区別は難しいから，地図に矢印がない以上，地図だけを判断基準とすると，オスマン帝国はウィーン付近までは進出(≒進攻)していないから，②は誤りという判断も成立する。

もちろん，オスマン帝国は 16 世紀のスレイマン 1 世の時代に最盛期を迎え，ヨーロッパ諸国に大きな影響を与えたこと，ハンガリーを支配下に置いた後にはウィーンに迫ったこと(第 1 次ウィーン包囲)は，受験生が知っておくべき基本的史実である。しかし，地図を読み取る能力を問うという視点から見ると，この選択肢は適切さを欠くといえよう。問題の難易度に比べて，正答率が 58.7%とそれほど高くないのは，これが原因なのかもしれない。教科書によっては(例えば東書 W)，オスマン帝国の支配領域を設問の地図よりはウィーンのすぐ近くまで描き，進出方向の矢印をウィーン方向に記した地図を掲載しているものもある。設問の地図を工夫すべきだったのである。

さらに，誤文選択問題としてのテクニカルな問題点もある。設問の要求は「トルコ系王朝の活動」の「記述として誤っているものを……選べ」である。②～④の主語は「オスマン帝国は」と「トルコ系の勢力は」で，述語はその活動についての動詞となっているが，

①だけがカイロを主語として，「繁栄した」という状態を説明する文となっている。つまり，史実や地図に基づく正誤判断をしなくても，①は「トルコ系王朝の活動」の説明ではないから誤りであるという判断も成立するのである。

このことは，①を「ファーティマ朝の支配下で，カイロが繁栄した」と，史実としては正しいといえる選択肢にした場合でも，この文は「トルコ系王朝の活動」を表していないから，誤文になるということである。他の選択肢に誤文があれば，正解が 2 つある出題ミスになる可能性が高いことに注意が必要である。

【修正案】

世界史を学ぶことは，現代の問題の背景や原点を知り，問題の本質や解決の方向性を，世界史的視野から考えるための前提となるという視点からの修正案を提示しよう。「トルコ系王朝の活動」の歴史を問うのであれば，【出題の妥当性】の冒頭で指摘したように，例えば現代の中東問題やパレスチナ問題について出題したい。これらの問題は，2001 年の 9.11 同時多発テロをきっかけとし，現在まで続く「対テロ戦争」の「通奏低音」となっている問題だからである。

対テロ戦争の特質や実態，この戦争が長期化した理由など，より詳しくは，延近『対テロ戦争の政治経済学』(明石書店，2018 年)をお読みいただきたい。

そうした視点から私が出題するとすれば，エルサレムをめぐるイスラム世界とヨーロッパ世界の軋轢としての 11 世紀からの十字軍遠征，15 世紀以降のオスマン帝国のヨーロッパへの進出，19 世紀のシオニズム，第一次世界大戦中のパワーゲームとしてのフサイン=マクマホン往復書簡・サイクス=ピコ協定・バルフォア宣言，第二次世界大戦後の国連総会のパレスチナ分割決議とイスラエル建国，4 次にわたる中東戦争などをテーマとして取り上げた小問を作成し，これら小問のガイドラインとなるリード文とともに，1 つの大問に構成したいところである(経済学部の過去の入試で出題済み)。

このような出題とすれば，基本的な知識の習得と思考力・判断力を評価しながら，現代の問題を考えるための歴史の学習の必要性という，受験生および高校教育へのメッセージを織り込み，さらに選抜機能を確保するという入試問題として望ましい出題となるであろう。なお，第一次世界大戦中のパワーゲームとイスラエル建国については，第 5 問 B で出題されているのであるが，この設問とは別の問題となっているためにメッセージ性は読み取れなくなっている。本稿冒頭の問題構成で，大問を解体し，各小問を再構成した方が適切であるとコメントしたのは，このような意味を含んでいる。

問 2　エレーナさんの班では，16 世紀から 20 世紀前半の人口移動に関心を持ち，その傾向を示した下の図を見ながら議論した。メンバーの発言の正誤について述べた文として適当なものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

下の図とは，北極上空から見た正距方位図法の地図で，人口移動の方向が各国・地域から目的地への矢印で描かれている。「メンバーの発言」と選択肢は以下のとおり。

伸之：インドからあちこちに移民が出ている。移民が増えたのは 19 世紀にイギリスで奴隷貿易が廃止された後の労働力として，需要が高まったからだよ。

エレーナ：東南アジアには，インドだけでなく，中国からも来ている。日本からも，17 世紀初期には移民が行っているわね。

ひとみ：インドからはアフリカにも行っているけど，インドとアフリカ東岸の交流は，ヴァスコ=ダ=ガマのインド航路の開拓によって始まったのね。

① 伸之が誤っている。② エレーナが誤っている。③ ひとみが誤っている。④ 全員正しい。

【出題の妥当性】

設問で提示された地図を見てまず疑問に思うのは，この図を描くためには人口移動を示す何らかの統計が必要なはずであるが，その出典が記載されていないことである。450 年間という長期間には多種多様の人の移動があるはずだが，どれぐらいの規模以上の人の移動を「人口移動」と規定して図に表示しているのだろうか。出典がない以上，「人口移動の傾向」をこのような図で示せる根拠は不明である。

また，「人口移動」といっても，自発的な人の移動だけでなく，奴隷貿易という人身売買，他地域の植民地化や対外侵略にともなう人の移動，国策による移民など，その理由や背景も多種多様であるはずである。世界史の知識がある受験生ほど，この図を見て数々の疑問がわくであろう。また，プレテストは「改革」の理念の具体化の一環として実施されたのであるから，このような地図を出題するということは，高校教育に携わる人たちに対して，「人口移動の傾向」の基準や，図の根拠となる統計や出典を明示するという社会科学の基本を無視して，生徒の教育をしてよいというメッセージとなっているのである。

設問の妥当性について，まず指摘しなければならないのは出題形式の問題点である。正誤判断をする「メンバーの発言」は，設問文では班別学習の「議論」ということであるが，3 人の発言内容は「議論」にはなっておらず，それぞれ自分の知識を表明しているだけであるから，この設問は誤文選択問題以外の何物でもない。にもかかわらず，班別学習とい

う設定のために，解答の選択の際に 3 人の発言内容の正誤判断をした後に，さらに発言者名と選択肢の番号との対応を確認するという余計なプロセスが必要となっているのである。

正誤判断の実質は，①はイギリスで奴隷貿易が廃止されたのは 19 世紀か否か，②は日本から東南アジアへの移民は 17 世紀初期か否か，③ ヴァスコ=ダ=ガマのインド航路の知識である。したがって，3 人の発言という形式をとらずに，この 3 つを表現する文章に①～③の番号を付ければ済むことである。「全員正しい」という選択肢が必要なら，設問文に「誤りがない場合には④と答えなさい」と書けばよいだけである。

次に出題内容の妥当性であるが，正解は③，つまり「ひとみ」の発言が誤りとされている。ヴァスコ=ダ=ガマのインド航路開拓は 15 世紀末であるが，「インドとアフリカ東岸の交流」としては，13 世紀からムスリム商人によってインドの香辛料などが紅海を経由してカイロに運ばれていた。したがって③が誤りということなのだろうが，この史実は「交流」であっても人口移動ではない。つまり，史実を知らなくても，「ひとみ」の発言は「人口移動」についてではないから誤りと判断することも可能である。

「伸之」の発言も因果関係がはっきりしていない。イギリスで奴隷貿易が廃止されたことが，西インド諸島での奴隷に依存しない労働力需要を高めて，インドからの移民を増加させたのだとしても，図に示されているインドからアフリカや東南アジアへの移民は，この論理では説明できないだろう。奴隷貿易の廃止とインドからの移民の増加について，教科書に明示的な説明はないので，両者の関係を出題する意図は理解できない。「エレーナ」の発言も，インド，中国，日本から東南アジアへの移民が行なわれたという事実を述べているだけで，その世界史的意味は何も語られていない。

つまり，「人口移動」について「議論した」という設定でありながら，3 人は自分の知識や地図から読み取ったことを一方通行で発言しているだけで，何の相互関係もない。これは「議論」とはとてもいえないものである。したがって，出題内容としても，相互に関連性のない知識を問うだけの設問となっている。しかも，上記で指摘したように，正誤判断をすべき 3 人の発言が曖昧なので，受験生は解答の際にかなり迷ったのではないか。正答率 25.9%とは 4 択の理論上の正答率にほぼ等しく，学力による選抜機能としてもほとんど意味を持たない設問となっているのは，これらが原因ではないだろうか。

【修正案】

この設問に対する具体的な修正案を提案しようとすれば，上述の理由から，ゼロから新しく問題を作り直さなければならないので，方向性を示すだけにとどめる。「改革」の理

念の具体化として，班別学習という設定を採用するのであれば，450 年間の「人口移動」の図を見て議論しようとする生徒たちに対して，教師を登場させ，上記の「人口移動」の背景とその影響を考えさせるようなコメントをさせるべきである。

例えば，450 年の間には各国・地域でいろいろな出来事や変化があったはずだから，この長い期間を一括して考えるのではなく，「人口移動」の要因や各国・地域の相互関係の変化などについて，時期区分をして考えてみてはどうか，というコメントである。このコメントを手掛かりとして，生徒たちが，設問の選択肢で取り上げられている史実を，「人口移動」という視点からとらえなおすという設定にするのである。

このように修正すれば，自発的な人の移動だけでなく，奴隷貿易という人身売買，国策による移民など，「人口移動」の背景とその影響を問う設問にすることができる。これこそが，世界史の入試問題のあるべき姿であり，生徒たちの AL と，その内容を有意義なものにするための教師の役割ではないか。大学のゼミナールでの学習がそうであるように。

問 3　真央さんの班では，現代のオーストラリアへの移民について調べ，下の表について議論した。そこで話題になっている白豪主義の撤廃に至った要因について述べた文として適当なものを，下の①～④のうちから選べ。

下の表とは，移民の出生国・地域別人数の表で，選択肢は，オーストラリアが，①「APEC によってアジア諸国との結びつきが強まった」，②「アジア=アフリカ会議を主催した」，③「南アフリカでアパルトヘイトが撤廃された影響を受けた」，④「ベトナム戦争によって発生した大量の難民を受け入れた」である。

【出題の妥当性】

この設問の正解は④とされている。『問題のねらい』の「小問の概要」によれば，「初見の資料から情報を読み取りオーストラリアの移民政策の転換の背景について考察する」とある。教科書では白豪主義の撤廃の要因について明確な説明はないし，実際，1 つの要因によって撤廃に至ったわけではなく，1960 年代以降の経済発展にともなって，アジア諸国との関係が深まったことが最大の要因といえよう。したがって，解答するためには表や「議論」を参考にして考えるしかない。その意味で，「問題のねらい」を設問として具体化しようとしたことは読み取れる。

しかし，移民の人数についての表では，上位 10 カ国に APEC 参加国，アジア=アフリカ会議参加国，南アフリカの国も入っており，ベトナムからの移民の人数は第 6 位で，こ

の表から④が正解という判断を導き出すのは無理だろう。ヒントになるのは「真央さんの班」の「議論」で，「いわゆる白豪主義は，1970 年代に撤廃された」と「私はカンボジア出身ですが，祖父母の世代には，インドシナ半島からオーストラリアに移住した人がたくさんいます」の 2 カ所である。

後者の「カンボジア出身」や「祖父母の世代」は曖昧すぎるヒントであって，ここから④を解答するのは困難である。結局，ヒントは白豪主義は 1970 年代に撤廃されたということしかなく，それ以前に起こった歴史的事象を選択肢の中から探すしかない。APEC は 1989 年から，アジア=アフリカ会議についての教科書の記述は 1955 年の第 1 回のみで，オーストラリアが主催したかどうかは不明，アパルトヘイト撤廃は 1991 年，ベトナム戦争は一般的には 1965 年のアメリカの本格介入以降を指すから，④が正解となる。これはかなりの難問である。正答率は 18.9%で，4 択の正答確率は 25%であるから，受験生が迷った末に，ダミーの選択肢の「ワナにはまった」のだとしたら，難問というよりは悪問といえよう。

【修正案】

正解を導き出すプロセスを考慮すると，この設問は 4 つの選択肢の歴史的事象が白豪主義の撤廃以前か以後かを問う問題となっている。表を読み解いても正解のヒントとはならず，「議論」も白豪主義の撤廃が 1970 年代であるという情報だけがヒントとなっている。したがって，この設問には表も「議論」も不要で，「オーストラリアで 1970 年代に白豪主義が撤廃された要因として，①～④の中からもっとも適切なものを 1 つ選びなさい」とすれば，問題として成立するのである。

史実の背景，因果関係などが教科書に明確な説明がない場合，資料を提示して考えさせるという「問題のねらい」は非常に有意義である。ただし，その「ねらい」，つまり知識の深い理解と思考力・判断力を問うという目的を成功させるためには，資料を読み解くことによって論理的に正解を導き出せることが必要である。このことを具体化するための方向性として修正案を示してみよう。

この設問でも，班別学習で「表について議論した」という設定でありながら，3 人は自分の知識や表から読み取れることを発言しているだけで，「議論」にはなっていない。そこで，問 2 と同様に教師を登場させる。設問で提示されている移民の出生国・地域の人数別の表は 2011 年の国勢調査によるものだが，白豪主義が撤廃された要因を考えるためには，他にどんな資料が必要だろうかと，教師に問いかけさせるのである。

必要な資料としては，白豪主義が維持されていた 1960 年代から撤廃以降を含む移民の出生国・地域の人数別の表，この設問の 4 つの選択肢の出来事を含む年表，オーストラリア国内での白豪主義をめぐる議論の概要などが考えられる。出題形式としては，4 人の生徒にこれらの資料のアイデアを発言させ，その妥当性を判断させてもいいし，実際に資料を提示して，どれが役に立つかを選択させてもよい。こうすれば，「問題のねらい」の知識の深い理解と思考力・判断力を問うという目的にかなう設問となるだろう。

B「紀元前から 20 世紀前半の中国の人口動態」についての設問

設問文は，BC340 年から AD1998 年までの，約 2300 年間の中国の人口(推計値)の変遷のグラフを提示するための説明のあとに，「このグラフに示されている人口動態は，歴代の王朝交替のたびに人口の増減を繰り返しながら，長期的には人口規模を拡大させてきた中国社会の特質を，よく映し出している」とある。

提示されたグラフを見てまず疑問となるのは，人口の推計値であるにもかかわらず，グラフの横軸には，BC202 年，AD 157 年，755 年，960 年，1566 年など，非常に厳密な年代が記されていることである。統計やグラフについて知識のある受験生ほど，このことに疑問を持つであろう。出典は，路遇・滕泽之『中国人口通史』と記されているが，同様の人口推計は他にも趙文林・謝叔君著『中国人口史』などがあり，推計値はかなり違っていて，専門的研究者の間でも議論があるようである。

しかも，私の確認できた範囲であるが，これらの人口推計値は，歴代の王朝の初期，中期，末期，あるいは個々の皇帝時代に時期区分された表に掲載されているのであって，毎年の人口増減を連続的に推計したものではない。当時は，現代のように継続的な国勢調査のようなものがあるはずもないから，これは当然であろう。そのような断片的な推計値を連続的な折れ線グラフで表示することは方法的に間違っている。推計値が示されている時点間で，実際の人口は大きく変動しているかもしれないからである。

方法的な間違いだけでなく，出題者が作成したグラフ自体にも重大な問題点がある。問 4 は，BC202 年～AD157 年，1661 年～1851 年という 2 つの時期の人口増加の要因を答えさせる問題となっていて，グラフではこの期間はほぼ直線的に人口が増加したように描かれている。『中国人口通史』では，BC202 年は前漢初期として 1310 万人，AD157 年は桓帝永寿 3 年として 6500 万人となっているが，この期間中， BC132 年に 3500 万人に増加した後，AD57 年に 2908 万人に減少している。設問のグラフは「『中国人口通史』よ

り作成」と注記しているにもかかわらず，この期間内の人口の増減を無視して，直線的な人口増加として描いているのである。

また，『中国人口通史』の推計値は，口数，考証人口，現中国版図人口の 3 種類が記載され，それぞれ年代によって空欄になっている場合もあり，このグラフのように推計値が連続しているわけでもない。出題者は，『中国人口通史』のデータの一部を意図的に排除したり,基準の異なる推計値を恣意的に連続させたりしてグラフを作成しているのだから，このグラフは「捏造」されたものと言わざるを得ない。研究者が専門論文でこのようなグラフを提示し,それを根拠として自らの見解を表明すれば研究者失格と評価されるだろう。

もちろん，入試問題であってもこのような「捏造」が許されるわけではない。この設問には AL が設定されていないが，「改革」は入試改革によって高校教育を導くという理念を掲げている。「改革」の重要な一環としての共通テストの試行調査において，このような「捏造」グラフを設問の資料とすることの悪影響を，出題者および問題点検者は推測できなかったのだろうか。

受験生・高校生，そして彼らを指導する高校教師にお願いしたい。このグラフを見て，「歴代の王朝交替のたびに人口の増減を繰り返しながら」といっても，各王朝が支配した地域は同じではないし，複数の王朝が併存していた時期もあるから，このような単純なグラフが描けるのだろうかという疑問をぜひ持っていただきたい。そのような疑問こそが，思考力・判断力を育てることになるのだから。

ただし，グラフの横軸には年代が記されているから，受験生は年代のみをヒントとして解答することも可能である。実際に，問 4～問 6 の出題内容はグラフを読み取る必要はなく，たんにこの時代にどんな史実があったかという知識を問うだけの設問になっている。

出題者は，中国の人口の増減に関係する問 4～問 6 を出題するために，人口の増減が一目でわかるような「きれいな」グラフを作成する必要があると考えたのかもしれない。しかし，これらの設問に解答するために必要なのはグラフに記載された年代だけだから，出題のためにグラフを「捏造」する必要はなかったのである。

問 4　グラフ中のア・イの時期と，その時代の人口増加の要因について述べた文との組み合わせとして正しいものを，下の①～④のうちから選べ。

アの時期は BC202 年～AD157 年で，イの時期は 1661 年～1851 年である。人口増加の要因は 4 つの選択肢で，a 「江南地方の開発の進展と米の新種の導入によって，穀倉地帯

が形成された」，b 「…トウモロコシやサツマイモなどの外来作物が普及し，増加した人口を支える食糧源となった」, c「農地の囲い込みが行われ, 穀物栽培の効率が向上した」, d 「…鉄製農具や牛耕農法の普及によって…農業生産力が高まった」，である。選択肢は①アと a，②アと c，③イと b，④イと d という組み合わせである。

【出題の妥当性】

BC202 年は漢(前漢)が建国された年であるが，AD 157 年にどのような意味があるかは，教科書や世界史年表ではわからなかった。イの時期が 1661 年～1851 年ということは，清の第 4 代皇帝の康熙帝の即位から太平天国の樹立までの期間である。4 つの選択肢で判断を問われている事実は以下のようになる。前漢から後漢の時代については，①江南地方の開発や米の新種が導入されたかどうか，②農地の囲い込みが行われたかどうかである。康熙帝から太平天国までの時代については，③トウモロコシやサツマイモが普及したかどうか，④鉄製農具や牛耕農法が普及したかどうか，である。

正解は③とされている。アメリカ大陸原産のトウモロコシやサツマイモが清代に中国に伝えられたことは，山川 W，帝書 W，東書 W に記述がある。ただし，「増加した人口を支える食糧源となった」については，山川 W の記述はそのように読めるが，東書 W と帝書 W は人口増の背景としての説明である。因果関係としては，外来作物が普及して食糧生産が増加したから，出生率の上昇や平均余命の長期化によって人口が増加したと考えるのが妥当であろう。④は紀元前の春秋時代にすでに鉄製農具や牛耕が普及していたことについて教科書に記述があるので，誤文と判断できる。

①の江南の開発については，教科書に 10 世紀から 13 世紀の宋代に進んだという記述があるが，前漢と後漢の時代に江南の開発が進まなかったかどうかは不明である。コメの新種導入についても教科書の記述は見つからなかった。したがって，①が誤文と断定できるかどうかは私には判断できなかった。②の「農地の囲い込み」は，例えばイギリスの第 1 次と第 2 次のエンクロージャーのように，世界史の用語として時代や状況を特定できるのだろうか。教科書にも用語集にも記述がないため，正誤判断はできなかった。

④以外は正誤判断が明確にできる選択肢となっていないから，正誤判断の問題としての適切さを欠いている。正答率は 54.1%でほぼ 2 択の確率であるから，受験生が④は明確な誤り，②は曖昧すぎるので排除し，①と③の 2 択で解答した結果なのかもしれない。

以上のように，この設問は，たんなる史実の知識の有無を問うのではなく，中国の人口増加の要因を考えさせようという意図は読み取れるのだが，選択肢の文章が曖昧であるた

めに，正誤判断のための明確なレファレンスを欠くものとなっている。したがって，受験生の学力を適切に評価するという点でも，受験生が学習するための素材や視点を提示するという点でも，入試問題として不適切な設問である。

問 5　グラフ中の X・Y の時期には，人口減少が見られる。その原因や，人口減少という状況に対して取られた対応について述べた文として最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

X の時期は 157 年～220 年であるから，後漢時代後半である。Y の時期は 755 年～960 年で,唐中期の安史の乱の始まりから宋の建国までの時期である。選択のレファレンスは，①は X の時期の大規模な反乱をきっかけとして社会が不安定となった,②は X の時期に土地・資産への課税が導入された，③は Y の時期に反乱によって王朝が倒れた，④は Y の時期に戦争捕虜を奴隷として大農場経営が行なわれた，である。

【出題の妥当性】

正解は①とされている。後漢時代の 184 年に起こった黄巾の乱が後漢の崩壊の要因になったことは教科書に記述がある。しかし，グラフでは人口減少は 157 年から始まっているのだから，黄巾の乱は 157 年～184 年の人口減少の原因とはなりえない。したがって，①は「適当なもの」ではない。②の土地・資産課税の導入は，唐代(780 年)の両税法導入を指して時代の誤りとする意図かもしれない。しかし，「～税制」のような固有名詞が記述されていない以上，時代を特定できないし，この文だけでは人口減少の「原因」とも「対応」とも判断できないから，②の正誤判断は不可能である。

③は，この時期に「王朝が倒れた」といえる史実として 907 年の唐の滅亡を指し，755 年からの人口減少の原因としては誤りという意図かもしれない。しかし，「王朝」は固有名詞ではないため，この時期以前または時期の初めに地域的な「王朝が倒れた」ことが人口減少の要因の 1 つとなった可能性を排除できない。④も同様に固有名詞がないから，この 2 つの選択肢も正誤判断は不可能である。

正答率は 48.1%でほぼ 2 択の確率である。第 2 問 B の設問文に「王朝交替のたびに人口の増減を繰り返しながら」とあるので，受験生が，反乱による政治の不安定化や王朝が倒れたことの記述がある①または③を，2 択で解答した結果ではないだろうか。

この設問も問 4 と同様に，たんなる史実の知識の有無を問うのではなく，中国の人口減少の要因を考えさせようという意図は読み取れる。しかし，選択肢の文が問 4 以上に曖昧

であるために，正誤判断のための明確なレファレンスを欠くものとなっている。したがって，「改革」の理念の具体化に成功していないだけでなく，明確な正誤判断も不可能であるから，悪問であると同時に出題ミスである。

問 6　グラフ中の Z の時期には，世界の他の地域でも人口減少が見られる。その時期に世界の他の地域で見られた人口減少と関連した社会不安の状況を調べるための資料として適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

「グラフ中の Z の時期」とは 1566 年～1661 年である。選択肢は①「強制栽培制度の行われた地域における飢饉の発生数の統計」，②「ゲルマン人の移動経路を示した地図」，③「ラダイト運動の発生件数の推移を示したグラフ」，④「三十年戦争におけるドイツの死者数の総計」である。

【出題の妥当性】

設問文を読むと，4 つの選択肢の正誤判断をする基準が，40 字以上も読点もなく記述されているのに違和感を覚えるが，ともかく選択肢の資料の適否を判断しなければならないことはわかる。設問文を普通に読めば，4 つの選択肢の資料が「社会不安の状況を調べるための資料として適当」であるかどうかが，適否の判断基準であろう。この基準にしたがって，資料の適否を受験生に考えさせ，判断させることが出題者の意図であると解釈できる。

受験生も当然そのような判断を要求されていると思うだろう。統計を読み解く能力と思考力・判断力を持った受験生ほど，「飢饉の発生数」，「ゲルマン人の移動経路の地図」，「ラダイト運動の発生件数」，「ドイツの死者数」のどれが資料として適当だろうか，と考えるはずである。私もそのように考え，選択肢の資料がどのようなものかを調べてみた。

①の「強制栽培制度」は，オランダ支配下のジャワで，土地別に栽培作物の種類と生産量，労働者数などを指示し，生産物を低い公定価格で供出させた制度である。オランダ支配に対する民衆蜂起であるジャワ戦争後の 1830 年に，オランダ政庁が財政悪化への対応として導入した。②の「ゲルマン人の移動」が「ゲルマン人(民族)の大移動」を指すのだとすると，4 世紀末から約 200 年間の出来事である。③のラダイト運動は，イギリスの産業革命期の 1810 年代，繊維工業部門への機械の導入によって，失業と生活不安の脅威にさらされた手工業者や職人による機械打ちこわし運動である。④の三十年戦争は，1618 年～48 年のドイツの新旧キリスト教の宗教対立を契機とし，ヨーロッパ各国が参加した戦争である。

選択肢の資料の性格がわかったとして，どれが「社会不安の状況を調べるための資料として適当」だろうか。どの資料も何らかの意味で「社会不安の状況」と関係しているように思えるから，これはかなりの難問である。私は，ここまで調べてやっと気が付いた。判断基準は，「社会不安の状況を調べるための資料として適当」であるかどうかではなく，「その時期に世界の他の地域で見られた人口減少……」なのではないか。とすれば，三十年戦争だけが Z の時期の出来事であるから，正解は④となる。公表されている正解を確認すると，たしかに正解は④とされている。

つまり，どの資料が「社会不安の状況を調べるための資料として適当」かなどと考える必要はなく，これらの史実が 17 世紀前後の出来事であるかどうかという知識を問う設問でしかなかったのである。しかも，④以外は，すべて Z の時期とは 200 年から 1000 年以上も時代が違う史実に関係する資料で，当然のことながら相互の関連性もまったくない。

したがって，この設問の趣旨を簡潔に表現すれば，「次の①～④のうち，1566 年～1661 年に起こった出来事を 1 つ選びなさい」である。あるいは，グラフは中国の人口についてであるから，「1566 年～1661 年」の代わりに，「明の隆慶帝の即位から清の康熙帝の即位まで」でもよい。このように修正すれば，この設問が「改革」の理念とは正反対の，相互関係のない史実の年代の暗記を問うだけの問題であることが，さらに明らかであろう。

受験生の思考力・判断力を評価する設問ではないにもかかわらず，「社会不安の状況を調べるための資料として適当なもの」を選べという表現によって，思考力・判断力をもった受験生(と私)をかえって惑わせることになっているのである。時代も地域も異なり，相互に関係性もない史実の年代暗記問題を出題する意味は何なのだろうか。プレテストは幅広い時代や地域について出題していますという「アリバイ作り」としか思えない。

事実上の年代暗記問題でその難易度も高くないのだが，この設問の正答率は 49.2%とほぼ 2 択の確率になっている。これは，正誤判断の基準が「1566 年～1661 年」の時期の出来事か否かであることに気づかなかった受験生が，「人口減少」に関係のありそうな選択肢として，①の「飢饉の発生数」か④の「死者数」だろうと考えた。しかし，このどちらが正解かの判断は難しいから，結果的に正答率が 2 択の確率になったのではないか。この推測が正しければ，この設問は不適切というより悪問である。

第 3 問 「民主反乱」をテーマとする設問

設問文は「世界史上の民衆反乱について述べた次の文章 A・B を読み，下の問い(問 1～

6)に答えよ」である。

A「プガチョフの乱」についての設問

プガチョフの乱を説明した約 300 字のリード文中に，3 つの下線部があり，それぞれについての 3 つの小問から構成されている。

問 1　下線部①の人物は，ピョートル 3 世の後に即位し，皇帝となった。その人物の名と事績の組合せとして正しいものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

下線部①は「皇后」である。選択肢は以下のとおり。

①マリア=テレジア ― クリミア戦争を戦った。

②マリア=テレジア ― ポーランド分割に参加した。

③エカチェリーナ 2 世 ― クリミア戦争を戦った。

④エカチェリーナ 2 世 ― ポーランド分割に参加した。

【出題の妥当性】

マリア=テレジアはオーストリア大公で在位は 1740～1780 年，エカチェリーナ 2 世はロシア皇帝で在位は 1762～1796 年である。ポーランド分割は 1772 年で，クリミア戦争は 1853～1856 年である。細かい年代を暗記していなくても，2 人の女性が 18 世紀の人物であることは基本的な知識といえるから，①と③のクリミア戦争の選択肢は排除され，正解は②か④である。

ポーランド分割はマリア=テレジアもエカチェリーナ 2 世も参加しているので，これだけでは正解を②か④のどちらとも決定できない。しかし，リード文には「プガチョフは……ロシア皇帝ピョートル 3 世であると名乗って」という表現があるから，その「皇后」も当然ロシアの皇后と判断できるから，正解は④と断定できる。

プレテストの「問題のねらい」でも，この設問は知識を問うだけの問題とされている。解答に必要な知識も基礎的なもので，問題の難易度はかなり低い。正答率 64.2%は，プレテストの受験者層への出題としては妥当かもしれない。ただ，高偏差値の大学では選抜機能がほとんどない問題である。

【修正案】

問題の難易度を上げて選抜機能を確保するためには，マリア=テレジアとエカチェリーナ 2 世を伏せて，彼女たちの治世・政策，家系，他国との関係などを示して判断させる設問が考えられる。思考力・判断力も問う問題とするには，エカテリーナ 2 世は啓蒙専制君

主とされているから，ロシアを含む各国の政策や啓蒙思想についての出題が考えられる。

問 2　下線部②に関連して，民衆の政治的な動きを描いた次の図版 a～c が年代順に正しく配列されているものを，下の①～⑥のうちから一つ選べ。

下線部②は「民衆の力」である。各図版にはそれぞれ説明文があり，a は「圧政の象徴とされる牢獄を，民衆が襲撃した」，b は「皇帝に対して和平と飢餓救済を請願する民衆に，軍隊が発砲した」，c は「傭兵の反乱をきっかけとして，民衆が広く参加する大反乱に発展した」となっている。

a の図版はフランス革命期の 1789 年の「バスティーユ牢獄の襲撃」(襲撃が行なわれた 7 月 14 日がフランスの革命記念日)を描いたものである。この出来事の図版は，参照したすべての教科書に掲載されているが，実教と帝書が同じで，東書と山川はそれぞれ別の図版が使われている。設問の図版はこれら 3 種類の図版とも異なるものである。

b の図版は 1905 年の「血の日曜日事件」を描いたものである。この出来事の図版は，実教，東書，山川に掲載されているが，いずれも異なる図版で，設問の図版は山川と同じである。

c の図版はイギリスの植民地支配下のインドで，1857 年に起こった「シパーヒー (インド人傭兵)の反乱(またはインド大反乱)」を描いたものである。この出来事の図版は 4 社の教科書すべてに掲載されているが，実教と帝書が同じもの，東書と山川はそれぞれ別の図版である。設問の図版は実教・帝書と同じである。

【出題の妥当性】

設問で提示されている図版はやや不鮮明で，図版から読み取れる情報だけではどんな出来事を描いているのかを判別することは難しい。また，普通の受験生は 1 社の教科書だけで学習しているから，教科書の図版を記憶していたとしても，それが設問の図版と同じでなければ出来事を判別することはできない。だからこそ，図版に説明文が付けられているのだろう。私が図版を判別できたのも，説明文をもとに教科書を参照した結果である。判別のキーワードとなったのは，a は牢獄の襲撃，b は皇帝・和平を請願する民衆・軍隊の発砲，c は傭兵の反乱である。

つまり，図版から得られる情報は，この設問に解答するためにほとんど意味をもっていないのである。では，説明文だけで解答が可能かといえば，a は「牢獄の襲撃」によってバスティーユの襲撃を想起することはできるし，b の「傭兵の反乱」といえば教科書の記

述ではシパーヒーの反乱ぐらいしか該当しない。しかし，c は複数のキーワードがあっても，該当しそうな出来事はかなりありそうで，「血の日曜日事件」に到達するのはかなり難しい。しかも，この 3 つの図版を年代順に並べ替えるのだから，1 つでも判別を間違うと誤答となってしまう。正答率が 43.9%とやや低いのは，これが原因であろう。a の説明文には「ロシア皇帝」を挿入してもよかったのではないだろうか。

つまり，この設問は，説明文を出来事を特定しやすくなるように修正すれば，史実を年代順に並べ替える問題として成立し，図版は不要となるのである。ただし，『問題のねらい』の「思考力・判断力・表現力」の欄には，「歴史的事象を時系列的にとらえることができる」と書かれている。この 3 つの出来事を年代順に並べ替えることが，なぜ思考力や判断力を評価することになるのだろうか。

「時系列」とは，広辞苑によれば「ある現象の時間的変化を連続的に，または一定間隔を置いて不連続に観測して得た値の系列」である。「ある現象の時間的変化」であるから，史実に置き換えれば，「時系列的にとらえる」ためには，複数の出来事に何らかの関係性がなければならないのである。

出題者は，これら 3 つの出来事に関係性を見出したのだろうか。血の日曜日事件はシパーヒーの反乱の後でなければならず，シパーヒーの反乱はフランス革命の後でなければならない関係性である。あるいは逆に，フランス革命があったからシパーヒーの反乱が起こり，シパーヒーの反乱があったから血の日曜日事件が起こったという関係性である。設問文にある「民衆の政治的な動き」という共通性は，これらの出来事相互の関係性ではない。関係性がなければ，この設問は，「思考力・判断力」によって史実を「時系列的にとらえる」ものではなく，実質的には史実の年代を暗記しているかどうかを問う問題でしかない。

【修正案】

「民衆の政治的な動き」に関する史実を「時系列的にとらえる」ことを受験生に求める問題を私が作成するとすれば，例えば，アメリカ独立戦争，フランス革命，ラテンアメリカ植民地の独立などをとりあげるだろう。これらの史実の時系列関係や相互関係がどのようなものかは，世界史の教科書の該当箇所を読めば，1 つのストーリーとしてすぐに浮かび上がってくるはずである。

そのストーリーを要約してリード文とすれば，18 世紀から 20 世紀にかけてのヨーロッパ諸国と南北アメリカ諸国の相互関係，人権や国民国家についての思想的な発展などについて，さまざまな小問から構成される大問を作成することができる。このような問題こそ

が，時系列的関係や因果関係を受験生にとらえさせ，史実の理解に基づく思考力・判断力を問うことのできる入試問題なのである(経済学部の過去の入試で出題済み)。

問 3 下線部③について述べた文として適当なものを，下の①～④のうちから選べ。

下線部③は「ロマン主義」である。選択肢は以下のとおり。

① 個性や感情を重視し，歴史や民族文化の伝統を尊重した。

② 古代ギリシア・ローマの文化を理想とし，調和を重んじた。

③ 適者生存を原理とし，人種差別を擁護するのに利用された。

④ 光と色彩を重視し，主観的な印象を描いた。

【出題の妥当性】

正解は①とされている。①は用語集の「ロマン主義」の説明の一部をそのまま引用したものである。②は帝書の「古典主義」の説明をほぼそのまま引用したもので，用語集にも同様の説明がある。④も用語集の「印象派」の説明を基にしていると思われる。③は，おそらく「社会ダーウィニズム」の考え方を念頭に，帝書の説明を参考にして出題者が作文したものと思われる。この文は，述語が「利用された」となっているように，「～主義」を直接的に説明した文章ではないから，「適者生存」が「ロマン主義」とは無関係であることはすぐに判断できる。したがって，正解は①，②，④のどれかとなるが，用語集を勉強していれば，正解とされる①を答えるのは容易であろう。それにしては正答率は 52.5%とそれほど高くない。その原因は何か。

教科書の「ロマン主義」の説明を見ると，実教は「人間の感情の解放と躍動する個性の尊重を説き」とあり，帝書は「調和よりも躍動を，理性よりも自由な感情を，そして普遍性よりも個性を重視した」で，この 2 社は「歴史や民族文化の伝統」への言及がない。東書は「民族の歴史的個性や伝統，人間の熱情や意思を称揚する」，山川は「個人の感情や想像力を重んじ，歴史や民族文化の伝統を尊ぶ」である。この 2 社が「歴史や民族文化の伝統」に言及しているが，「個性や感情」については実教と帝書の説明とはニュアンスが違う。つまり，どの教科書で勉強したかによって，①の正誤判断が分かれる可能性が強いのである。その結果が正答率約 5 割なのではないか。

教科書によって「ロマン主義」の説明が分かれるのは，そもそも「～主義」をごく短い文章で説明することには無理があるからである。教科書では「～主義」の説明とともに，その代表とされる芸術家の名前が列挙されているのが通例である。しかし，彼らが自分の

作品すべての特徴を一括してごく短い文章で説明され，しかも他の芸術家のすべての作品と共通している特徴として紹介されたとしたら，おそらく「～主義」とされた芸術家全員(リード文のプーシキンも含めて)が，自分の作品で表現しようとしたのはそのようなものではない，と強く異議を唱えるであろう。

ただ，教科書の場合にはこのような無理も許容されうる。例えば，教科書で「ロマン主義」と紹介された作家の小説を高校生が読んで，教科書の「ロマン主義」の説明とは異なる感想をもったとしよう。その高校生は，なぜこの作家が「ロマン主義」とされているのか疑問をもち，その作家の他の作品も読んで，同じ作家でも表現の多様性や幅広さに気づくかもしれない。また，同じ作品でも読者によって異なる感想をもつことに気づき，文学作品を批評するとはどういうことなのかを考えるかもしれない。教科書の説明はそのきっかけとなりうるし，教師が，教科書の説明を絶対視せずに素材として利用し，生徒をそのような方向に誘導すればよいのである。

しかし，プレテスト(さらには共通テスト)において，「～主義」の説明を正誤判断形式で出題するのは，「改革」の理念を否定したも同然である。教科書の説明が多様であるにもかかわらず，1 つの解釈を正解とし，それ以外の解釈を誤りとして排除することになる。そして，正解に到達するためには，考えることや疑問をもつことなく，ただ無批判に「～主義」の説明という知識を暗記すればよいというメッセージを，受験生や高校教育界に発信することになるからである。

【修正案】

文化史の問題としては，「ロマン主義」と呼ばれる思潮がどのような時代背景で登場したのか，そのような思潮は，18 世紀から 19 世紀の急速な社会変革の時代にどのような影響を与えたのか，というストーリーを描いて出題するのが妥当であろう。出題の素材として，図版や文学作品の一部の引用などを資料として提示するのも適切である。そうした出題内容であれば，問 2 との連携を示して受験生の学習の指針ともなるし，問 2 の修正案として提案したリード文からの派生問題として，この時期の社会変革をテーマとした大問を構成することも一つの方法であろう。

B「19 世紀アジア・アフリカの民衆反乱」についての設問

設問文は「19 世紀のアジア・アフリカで起こった民衆反乱」についての 3 つの資料を提示するための文章である。3 つの資料の出典が記載されていないので，原典で確認するこ

とはできなかった。資料 1 には「東学軍」，資料 2 には「バーブ」，資料 3 には「マフディー」と「サヌーシー派の指導者」という固有名詞がある。出題者の意図は，これらの固有名詞から，資料 1 は朝鮮の東学党に関するもの，資料 2 はバーブ教の開祖に関するもの，資料 3 はスーダンのムハンマド=アフマドに関するものと推測できる，ということであろう。

問 4　資料 1 と資料 2 に関わる反乱がおこる直前のそれぞれの地域の状況について述べた次の文 a と b の正誤の組合せとして正しいものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

a　資料 1：日本との協約によって，外交権を喪失していた。

b　資料 2：2 度のイギリスとの戦争によって，その保護国となっていた。

選択肢は a の正誤と b の正誤の組合せの 4 種類である。

【出題の妥当性】

資料 1 に関わる反乱とは朝鮮の甲午農民戦争(1894 年)，資料 2 に関わる反乱とはイランのバーブ教徒の乱(1848～50 年)を指すと思われる。地域の状況の a は第 2 次日韓協約(1905 年)，b は第 1 次アフガン戦争(1838～42 年)と第 2 次アフガン戦争(1878～80 年)から，アフガニスタンの事実上の保護国化(1905 年)という状況を指すと思われる。a，b どちらも「反乱」の後の状況であるから，正解はどちらも誤とした選択肢④となる。

甲午農民戦争と第 2 次日韓協約は，朝鮮をめぐる日本と清，ロシア間の一連のパワーゲームのなかの出来事で，最終的に 1910 年の日本による韓国併合にいたる経緯は，世界史だけでなく日本史としても受験生が理解しておくべき必修事項である。したがって，この 2 つの出来事の時系列関係を出題することは妥当である。

バーブ教徒の乱とアフガン戦争は，イランおよびアフガニスタン地域におけるイギリスとロシアのパワーゲームに規定された出来事であり，現在のこの地域の不安定さや「対テロ戦争」の原点の 1 つという意味でも出題する意義がある。ただし，資料 2 をバーブ教の開祖に関わる文章だと読み取った受験生は，b をイランの状況についての文章と受け取り，19 世紀のイランの歴史の記憶を呼び起こして正誤を判断しようとするだろう。「反乱」の直前のそれぞれの地域の状況について」という正誤判断の基準を提示しておきながら，アフガニスタンの状況を示して誤りとするのは，正誤判断問題としてアンフェアで妥当性に疑問があるが，「それぞれの地域」も基準と解釈して許容範囲としよう。

問題は出題形式である。この設問では，朝鮮の状況とイランの状況の両方に正解することを要求している。この設問の構造は，資料から国・地域を読み取り，次に a・b の状況

とその国・地域の「反乱」の前後関係を判断するという 2 段階となっている。陸上競技に例えれば，資料 1 と資料 2 のコースにそれぞれ 2 つのハードルが設置され，両方のコースの計 4 つのハードルを越えられた選手のみがゴールできる，つまり正解となるのである。

どちらかのコースの 2 つのハードルを越えても，もう 1 つのコースで失敗すれば，ゴールできない，つまり得点なしとなるのであるから，1 つのハードルも越えられなかった受験生と同じ評価になるということである。4 つのハードルが 1 つのコースに設置されていたとしたら，つまり朝鮮とイランの状況に何らかの関係性があり，その関係性を理解していることが必須であるのならば，この出題形式は合理性をもつ。

しかし，19 世紀段階の中東地域と東アジア地域との間に，入試問題で問うべき明確な関係性はないであろう。したがって，受験生の学力を適切に評価するという入試問題の目的からすれば，この出題形式は合理性を欠いており，選抜機能を歪める悪問である。正答率が 23.6%と 4 択の確率にほぼ等しいという結果がその証明ではないだろうか。

【修正案】

上述のように，19 世紀の朝鮮とイラン・アフガニスタンを舞台とした列強のパワーゲームを出題することは有意義である。ただし，この設問のように両地域を一括するのではなく，それぞれの地域のパワーゲームの推移について，時系列や因果関係を考えさせ，受験生の学力を適切に評価できる問題にする必要がある。例えば，朝鮮半島の状況について出題するならば，出題の対象時期を 20 世紀初めまで延長し，1875 年の江華島事件から 1910 年の韓国併合までとする。この間の日・清・ロシア間のパワーゲームの推移を歴史的ストーリーとしてまとめれば，日清修好条規，日清の天津条約，甲午農民戦争，日清戦争，日露戦争，3 次にわたる日韓協約，ハーグ密使事件などが出題候補となる。

これらの出来事には強い時系列的関係と因果関係があるから，歴史的ストーリーの要約をリード文として，誤文選択，並べ替え，年表挿入問題，論述問題と多様な形式で出題することが可能である。例えば，並べ替え形式で出題しても，同じ年に発生した出来事が複数あるから，時系列や因果関係を理解していなければ解答できない問題となる。年代を暗記しただけでは解答できないのだから，歴史の流れの理解と思考力・判断力を評価するという「改革」の理念を具体化する出題が可能となるのである(経済学部の過去の入試で出題済み)。

問 5　資料 3 における「私」を指導者とする反乱がおこった地域の名と，その位置を示す次の地図上の a または b との組合せとして正しいものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

「次の地図」とは，アフリカの地図のアルジェリアとスーダンがある地域に，それぞれ a と b の文字を付した円が描かれた図である。

【出題の妥当性】

国や地域の位置を円で示すのは曖昧すぎるから，現在のアフリカ諸国の国境を(もちろん，国境は現在のものと注記して)描くのが普通だと思うが，それは問わないことにする。選択肢は両地域名と a の b の組合せの 4 つであるから，現在の両国の大まかな位置を知っていれば解答は 2 択になる。資料 3 でスーダンが特定できれば正解できる，資料の読み取りと地理の問題を組み合わせた設問である。

出題者が，スーダンの地図上の位置を知っておくことは，世界史受験生の必修知識と判断したことの是非は問わない。問題は資料 3 からスーダンを特定できるか否かである。特定できる可能性のある語句は，「マフディー」と「サヌーシー派」であるが，「マフディー」は固有名詞ではなく，イスラムの「救世主」またはイスラム教シーア派の「指導者」を意味している。第 4 代カリフのアリーの子やファーティマ朝の開祖など，歴史上マフディーを名乗った人物は複数存在する。したがって，「マフディー」または「マフディーの乱」だけでは，スーダンを特定できない。

もう一つの「サヌーシー派」は東書だけに記述があるが，「リビアのサヌーシー教団」という説明である。つまり，資料 3 の原典を知っている受験生以外，スーダンを特定できないから，ほとんどの受験生にとって解答が不能な難問である。正答率は 47.0%でほぼ 2 択の確率であるから，受験生はスーダンの位置は知っていたとしても，資料 3 は解答のヒントにならなかったということである。また，「サヌーシー教団」を知っていた受験生は，現在のリビアはアルジェリアの東側の国境に接する国であるから，解答に困ったであろう。このことを考慮すると，この設問は難問というより，悪問と評価せざるを得ない。

問 6　資料 1～3 に関連して述べた次の文中の空欄 ア に入れる内容として適当なものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

これらの反乱は，列強の政治的・経済的進出や国内の支配層の抑圧のために従来の生活習慣を破壊された民衆が， ア から起こったものであった。

① 既存の伝統的な宗教や文化によりどころを求めたこと

② ヨーロッパの政治思想を吸収して政治意識に目覚めたこと

③ 民族意識を覚醒させ，国民国家の建設を目指す運動を激化させたこと

④ 社会主義思想に基づく経済的・社会的平等の実現を目指したこと

【出題の妥当性】

まず，この設問が入試問題として成立するためにもっとも重要な，空欄 ア を含む文自体に難点がある。これら 3 つの民衆による武装蜂起を「　」でくくることもなく，「これらの反乱は」と躊躇なく表記すること自体，私には違和感があるが，それは措くとしよう。3 つの「反乱」には，「列強の……抑圧」に対して蜂起したという共通性があることは認められる。しかし，民衆が武装蜂起する理由または動機を，出題者が「従来の生活習慣を破壊された」と一括して説明した根拠は何だろうか。

私の手元にあるすべての教科書や参考文献，およびインターネット検索では，このように説明できる根拠は確認できなかった。出題者にも根拠がなければ，この説明は出題者の思い込みでしかない。この難点は，「列強の政治的・経済的進出や国内の支配層の抑圧に対して民衆が」と修正すれば，何とか解消できる。しかし，空欄に入れるべき選択肢にも決定的な不備がある。

正解は①とされている。甲午農民戦争は，東学党の乱とも呼ばれ，東学は崔済愚が 1860 年頃にキリスト教の西学に対抗して創始した新宗教であることは，すべての教科書と用語集で説明されている。バーブ教も同様に，サイイド=アリー=ムハンマドが 19 世紀中頃に創始したと説明されている。マフディーの乱も，ムハンマド=アフマドが 19 世紀後半に創始したイスラム教マフディー派を中心とする反乱という趣旨の説明である。

3 つの反乱がこれらの新宗教を基盤としていることは明らかであるのに，出題者はなぜ「既存の伝統的な宗教……」を正解にしたのか，問題点検者はなぜ疑問を呈さなかったのか，私にはまったく理解できない。①以外の②～④も「空欄に入れる内容として適当なもの」でないことは明らかであるから，この設問は正解のない出題ミスである。正答率は 17.0%で全問中もっとも低い値である。民衆蜂起の動機として多少「適当なもの」らしいのは③だから，確信はもてなくても③と答えた受験生が大半だったのではないか。この正答率の低さが出題ミスの証明であろう。

3 つの「反乱」の共通性を「従来の生活習慣を破壊された」と断定していること，「反乱」の主体が「新宗教」の信徒であるのに，何の根拠も示さずに「既存の伝統的な宗教や文化によりどころを求めたこと」を正解としていること，そして，受験生・高校生にこの 3 つの「反乱」の性格を誤解させることになるという意味で，この設問は悪問でもある。なぜ，この設問が出題の妥当性のチェックを通過してプレテストで出題されてしまったの

か，部外者の私には不可解である。

第 4 問 「世界史における家族や家庭」をテーマとする設問

第 4 問の設問文は「世界史における家族や家庭について述べた次の文章 A・B を読み，下の問い(問 1～6)に答えよ」である。

A「前近代の君主や最高指導者の地位の継承」についての設問

文章 A は「あるクラスの班別学習で，前近代の君主や最高指導者の地位の継承について調べて資料 1～4 の系図を作成し，気づいたことを話し合った」で，「史恵」と「歴彦」の 2 人の会話が提示されている。系図は，資料 1 が第 4 代までの正統カリフ，資料 2 が第 5 代までのローマ皇帝，資料 3 が 9 代までのカペー朝，資料 4 が第 5 代までのモンゴル帝国君主である。

問 1　会話文中の空欄 ア と イ に入れる語の組合せとして正しいものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

空欄に入る選択肢を限定する会話文は，「史恵：君主や最高指導者の子孫でないと後継者にはなれないのかな。ア の例だと先代の息子しか位についていませんね」，「歴彦：そうとも限らないよ。イ の例では，後継者は……初代と血のつながりのある子孫とは限りません」である。選択肢は，アと資料 1，3 の組合せ，イと資料 2，4 の組合せで，4 種類である。

【出題の妥当性】

空欄アの選択肢は資料 1 の正統カリフと 3 のカペー朝で，空欄イの選択肢は資料 2 のローマ皇帝と資料 4 のモンゴル帝国君主であるから，系図を見れば，アが直系の子孫しか王となっていないカペー朝，イが姻族の子孫も皇帝となっているローマ皇帝であるとわかる。世界史の知識がなくても，系図を読み取れれば正解に到達できるから難易度は低い。正答率が 73.6%と高いのも当然であろう。高偏差値の大学であれば，選抜機能はほとんどないだろう。

問題点は「班別学習」という設定の内容である。この設定は，「改革」で提唱されている AL の具体例を，入試問題として提案する意図があるのだろう。しかし，史恵はカペー朝の系図のみを根拠として王位は直系の子孫のみが継承と発言し，歴彦はローマ皇帝の系図を根拠として反論している。4 つの資料は時代も国・地域，宗教も異なるのだから，君

主や最高指導者の継承のあり方が異なるのも当然である。2 人の主張が別々の資料に基づいている以上，この会話は無意味であり，AL の議論としてはきわめて低レベルである。

出題者は，このような低レベルの議論が，高校教育における AL の具体例になると考えたのだろうか。高校教育の現場での「班別学習」において，生徒どうしがこのような会話をしたとすれば，教師は同じ資料を土台として議論すべきことを指摘するだろう。そのうえで，時代や国・地域によって，なぜ継承のあり方が異なるのだろうかと，その理由や背景を考える方向に会話を誘導するはずである。このような趣旨で設問を構成することこそが，「改革」の理念の具体化としての AL であろう。この設問は高校教育に悪影響を与えかねない AL の設定という意味で悪問である。

【修正案】

系図の読み取り問題は，選抜機能のために難易度の幅を広げるという意味で出題するとしても，継承のあり方の違いからその理由や背景を考えさせるように会話を修正する。あるいは，問題全体の字数を削減するために会話文を削除し，直系の子孫が継承している系図とそうでない系図の選択を指示する設問文とする。

そのうえで，4 つの資料のどれかについて，地位の継承とそこから派生した問題を出題する。イスラム教であれば，第 4 代正統カリフのアリーの継承の背景，その後のスンナ派とシーア派に象徴されるイスラム教の分派，さらには宗派対立が現代の中東問題においてもつ意味などが，入試問題として出題する意義のある論点である。また，カペー朝のあとのヴァロア朝時代の王位継承問題，そこから派生する英仏の対立と百年戦争についての出題も有意義であろう。

問 2　下線部①に当てはまる事例について述べた次の文章 a と b の正誤の組合せとして正しいものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

下線部①は「女性に継承権を認めていたり，女性を通じて継承権が子孫に伝えられるという考え方」である。文章 a は「西太后が，夫の死後に皇帝に即位して，国号を周と改めた」，b は「イングランド王エドワード 3 世が，母方の血筋を理由として，フランス王位継承権を主張した」である。

【出題の妥当性】

西太后は，清朝の同治帝の母で，戊戌の政変(1898 年)で政治の実権を握った人物である。「皇帝に即位」も「国号を周に改めた」も明らかな誤りである。b はヴァロア朝時代の英

仏対立に関する正しい史実である。

西太后もエドワード 3 世も世界史の基本的知識といえるから，正誤判断自体の難易度は高くない。しかし，正答率は 54.3%とほぼ 2 択の確率である。その原因は，第 3 問 B の問 4 の問題点と同じである。19 世紀末の中国の状況と 14 世紀の英仏の対立という，時代も地域もまったく異なる史実について，両方の正誤判断が正しくなければ，この設問の正解とはならないのである。受験生の学力を適切に評価するという入試問題の目的からすれば，この設問は選抜機能を歪める悪問である。

【修正案】

西太后を出題するなら，東アジアにおける日本を含む列強のパワーゲームと関係づけた出題が望ましいだろう。日清戦争後の列強による中国分割への動きと，それに対する康有為らの改革の試み(戊戌の変法)，反改革派によるクーデタ(戊戌の政変)，義和団事件，北京議定書などの時系列・因果関係を問えば，「改革」の理念を具体化することが可能となる(経済学部の過去の入試で出題済み)。

問 3　カリフ位について資料 1 から読み取れる事柄 a・b と，イスラーム教の宗派について述べた文あ・いとの組合せとして正しいものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

a　正統カリフは，すべて預言者ムハンマドと共通の祖先を持っている。

b　カリフが世襲になると，カリフは預言者ムハンマドの親族ではなくなった。

あ　アリーの子孫のみが指導者であるべきだとする人々が，スンナ派と呼ばれた。

い　イランでは，サファビー朝がシーア派を国教とした

選択肢は a・b の正誤と**あ・い**の正誤の組合せで 4 種類である。

【出題の妥当性】

a は資料 1 から読み取れるから正文である。b は，たんに「カリフ」とだけ表現しており，正統カリフの系図からは読み取れないことだから，誤文と判断できる。もちろん「カリフが世襲になる」も誤りである。**あ**はシーア派の説明であるから誤文である。**い**は正しい史実である。したがって，正解は a と**い**の組合せの②となる。

正誤判断問題としては難易度は低いと思われるが,正答率は 46.1%と 5 割を切っている。a は資料 1 から読み取れるから，**あ・い**の正誤判断で迷い，結果的に 2 択となったのかもしれない。問題点はここにある。この設問は，史実を暗記しているかどうかを問うだけの問題であり，「改革」の理念の具体化とは程遠いものである。問 1 で提案した修正案が適

切であろう。

B「19 世紀のイギリスの家庭」についての設問

B の設問文は，「19 世紀のイギリス家庭」についての先生と生徒の会話を提示するための文章である。会話は約 500 字の長文で，内容は，資料 5 の「労働者家庭の支出に占める食費の内訳」の表を素材とした問 4 と問 5 を出題するための文章と，ヴィクトリア女王の家庭を描いた絵画を資料 6 として提示し，問 6 を出題するための文章である。

問 4　会話文中の空欄 ［ ウ ］ に当てはまる語について説明した文として適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

空欄 ［ ウ ］ は，資料 5 の表を見た生徒の発言中にあり，「南アメリカ原産の ［ ウ ］ が出ています」である。選択のレファレンスは「南アメリカ原産」と，この食品の収入に占める支出率が，熟練労働者より未熟練労働者の方が高いという内容の生徒の発言である。選択肢のレファレンスは，①がアイルランドでこの作物の不作による飢饉，アメリカへの大量の移民，②がヨーロッパで肉類の保存などのために珍重，③がインドでイギリスによる専売制度に反対する運動，④がオスマン帝国経由でヨーロッパに伝わった，である。

【出題の妥当性】

資料 5 の表中の食品で，選択のレファレンスに該当するのはジャガイモで，②～④は資料に掲げられた食品に該当しないので，①が正解となる。アイルランドで 1840 年代に「ジャガイモ飢饉」が起こり，それがアメリカへの大量の移民の要因の一つとなったことは，すべての教科書に記述があり，このトピックを出題することは妥当である。正答率 65.8%と難易度も選抜能力も妥当なレベルと思われる。史実の知識とともに思考力・判断力も必要とする良問といえる。

【修正案】

「ジャガイモ飢饉」を出題するのなら，アイルランド農民が未熟練労働者と同様にジャガイモを主食の一つとしなければならなかったこと，飢饉によって大量の移民につながったことの背景も問いたい。イギリスのアイルランド併合と統治の問題，アイルランド人の自治獲得や独立をめざす運動の経緯など，現代のアイルランド問題の理解につながる出題が望ましい(経済学部の過去の入試で出題済み)。

問 5　下線部②に関連して，次の地図は，イギリスへの輸入品のルートを示したものであ

る。砂糖が入ってきた主なルートとして適当なものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

下線部②は「砂糖」である。地図上の砂糖の輸入ルートは，イギリスへの a～d の 4 つの矢印で示され，矢印の始点は，a が北アメリカ東海岸，b が西インド諸島，c がインド西海岸，d が中国南部で，選択肢は，① a，② b，③ c，④ d である。

【出題の妥当性】

この設問は，砂糖の輸入ルートを地図上の矢印から読み取らなければならないから，単純な知識の暗記問題ではない。とはいえ，選択肢の 4 つの地域の位置は常識の部類であろう。そこで，19 世紀のイギリスはどこから砂糖を輸入したかという知識が正解のカギになる。受験生はおそらく教科書に記述がある大西洋三角貿易を想起するだろう。この貿易は，アフリカ・アメリカ・ヨーロッパの 3 つの大陸を結ぶもので，大西洋を舞台とする貿易であるから，③と④は排除される。

砂糖の輸入先についての教科書の記述をみると，東書 W の三角貿易の図には「アメリカ大陸」，実教 W は「アメリカや西インド諸島」，帝書 W は「カリブ海やアメリカ大陸」，山川 W は「アメリカ大陸・西インド諸島」となっている。東書の教科書で学習した受験生は迷わず①を選択し，帝書・実教・山川の教科書で学習した受験生は，①と②両方とも正解と考えるはずである。設問文には「主なルート」とあるが，教科書にはアメリカ大陸と西インド諸島のどちらが主な輸入先なのか書かれていないから，①と②のどちらを選択すればよいのか迷ってしまうだろう。

入試センターは②，すなわち西インド諸島を正解としている。大西洋三角貿易についての知識の有無を問うだけの設問ににもかかわらず，東書で学んだ受験生は誤答となり，その他の教科書で学び，①と②で迷った末に①と答えた受験生も誤答となるのである。入試問題は教科書の記述を基礎とすべきであるから，受験生が使用している教科書によって正解が異なる設問は悪問であり，教科書の記述にしたがえば正解が 2 つになるのだから，出題ミスでもある。正答率が 29.9%と非常に低くなっているのは，その証明であろう。出題者と問題点検者は，出題の妥当性を複数の教科書で確認しなかったのだろうか。

【修正案】

イギリスの労働者の生活実態を素材として，イギリスの貿易について出題するアイデアは評価できるが，砂糖の輸入ルートだけを問うのはアイデアを生かし切れていない。イギリスを基軸とする大西洋とアジアの三角貿易を題材として，当時の国際経済関係とその変化にまで発展させた方が，思考力・判断力の評価とともに受験生の想像力を刺激し，「改

革」の理念に合致する。

問 6　下線部③に関連して，当時の社会の状況について述べた文 a・b と，当時の家族観について述べた文あ・いとの組合せとして正しいものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

下線部③は,資料 6 の絵を説明した先生の発言中にあり,「この絵は……イギリスのヴィクトリア女王の家族の絵です。③当時の社会の状況と中・上流階級の家族観を表しています」である。

当時の社会の状況

a　国王は「君臨すれども統治せず」を原則とするイギリスでは，王室に，国民生活やイギリス社会の手本を示す役割が期待されていた。

b　ドイツ皇帝が打ち出していた世界政策への対応を迫られていたイギリスでは，王室に，イギリスの強さを示す役割が期待されていた。

「当時の家族観」は，あが「女性が良き妻・母であることを理想とする家族観」，いが「女性も工場など家庭の外で働くことが望ましいとする家族観」という趣旨である。選択肢はそれぞれの組合せの 4 種類である。

【出題の妥当性】

ヴィクトリア女王夫婦と子どもたちの家族写真のような絵を資料 6 として提示した設問である。この絵から b の「イギリスの強さを示す役割が期待されていた」や，いの「女性も……働くことが望ましい」を感じとるのは困難である。したがって，a とあの組合せの選択肢が正解となる。また，実教と帝書には，あの趣旨の説明が欄外の注として記述されているから，問題としては成立している。

【修正案】

この設問は，安倍政権が「1 億総活躍社会」を政策目標として掲げる時世であるから，家族のあり方や女性の役割について出題したいという意図なのかもしれない。しかし,ヴィクトリア朝時代のイギリスについて出題するなら，この時代がイギリスの「黄金期」と称される理由や背景を問うのが正攻法ではないだろうか。

世界で最初に産業革命を実現し，圧倒的な工業生産力をもつにいたったイギリスが，その経済力と海軍力を基礎として，世界に対して商品と資本を輸出し，植民地を拡大していく過程，それがやがて列強との対立を激化させていく経緯など，取り上げるべき歴史上の論点は多数ある。また，労働者家族の生活についての資料 5 を提示したのだから，「黄金

期」を実現した工業生産力の基盤としての労働者の階級闘争，選挙法の改正などの出題も有意義であろう。

第 5 問 「第一次世界大戦」をテーマとする設問

第 5 問の設問文は「第一次世界大戦について述べた次の文章 A・B を読み，下の問い(問 1～6)に答えよ」である。

A「第一次世界大戦中のベルリン」**についての設問**

文章 A は，2 人の高校生がベルリンの文書館を訪れて，「第一次世界大戦中のベルリンに関する展示を見て会話を交わした」，というもので，直後に文献からの引用と思われる 3 つの資料が提示されている。資料の出典が記されていないので確認できないが，資料 1 は大戦開始時の皇帝の国民に対する演説，資料 2 は警察長官の「世情報告」との題名付き，資料 3 はキールでの「水兵蜂起」についての報告と思われる。

問 1　会話文中の空欄 ア と イ に当てはまる文の組合せとして適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

会話文のうち空欄に入る語を限定する部分は， ア については，高校生の一人が，資料 1 の皇帝の演説の「余はもはや党派なるものを知らぬ」の意味を尋ね，もう一人が「 ア みたいだね」と答えている。 イ については，「資料 3 の反乱が全国に広がって，最終的には イ ，戦争が終わるんだね」である。選択肢は以下のとおり。

① ア：ナチ党による一党独裁が行われること　イ：ボリシェビキが権力を奪って
② ア：共産党による一党独裁が行われること　イ：14 か条を受け入れて
③ ア：どの政党・団体も戦争を支持すること　イ：皇帝が亡命して
④ ア：政党というものが理解できないこと　　イ：ヴァイマル憲法が制定されて

【出題の妥当性】

①のナチ党は，国家社会主義ドイツ労働者党の略称で，1919 年に結成されたドイツ労働党を 1920 年にヒトラーが改名した党である。ボリシェビキはロシア語で多数派という意味で，1898 年に結成されたロシア社会民主労働党が，1903 年にレーニン派とマルトフ派に分裂した際に，レーニン派が自派をボリシェビキと称した。

②の共産党一党独裁については，ドイツで共産党が政権をとった史実はない。なお，ドイツ共産党は，ドイツ社会民主党を脱退したローザ・ルクセンブルクらが 1918 年に結成

した。14 か条は，ウィルソン米大統領が 1918 年に発表した 14 か条の平和原則を指すと思われる。この原則は大戦後の講和の基礎となったが，ドイツが 14 か条を受け入れて戦争が終わったわけではない。

③のアは資料から読み取れるし，イも史実である。④のアは資料の内容と反するし，ヴァイマル憲法の制定は戦後の 1919 年である。したがって，正解は③となる。

正解の③以外は，アとイの両方が誤りなので，どちらか 1 つが誤りとわかれば正解に到達できるから，この設問の難易度は低い。しかし，正答率は 49.6%とほぼ 2 択の確率である。考えられる理由は 2 つある。第 1 に世界史 B の問題全体の分量が多いこと，第 2 にこの設問自体の分量が多いことである。

第 1 について，『プレテストの結果報告』には設問別の無解答率のグラフが掲載されているが，大問の第 1 問から第 6 問へ，後の設問になるほど無解答率が急速に高くなっている。世界史 B の問題は 48 ページ，約 15,000 字という膨大な分量で，試験時間は 60 分しかない。受験生は，試験が始まると問題全体を一読して，自分が解答しやすいと思われる設問から解いていくものであるが，これだけの分量では一読するだけでもかなりの時間を要する。そこで，第 1 問から順に解答していったとすると，第 5 問や第 6 問に達するまでに時間切れとなった可能性がある。

第 2 について，この設問の資料は会話文も合わせると約 700 字である。資料を読む前に設問を見て問題の要求を確認してから，資料のうち解答に必要な部分を読むのが受験技術であるが，これだけの分量の資料を読むのはかなり時間が必要となる。試験終了が近づけば近づくほど，この設問の無回答つまり 0 点を避けるために，資料をきちんと読まずに「ヤマカン」で解答する可能性が高くなるであろう。難易度に比べて正答率が低いのは，これが理由ではないだろうか。

この仮説が正しいとすれば，問題全体の分量を減らすとともにこの設問の分量も減らすことが必要となる。ただし，これだけが理由ではなく，資料 2 は第 5 問 A の 3 つの設問の出題には使われていないし，解答のヒントの役割も果たしていないから不必要である。2 人の高校生の会話という設定も，これまでの「班別学習」や「議論」の設定と同様に，この設問に不可欠な設定ではない。

【修正案】

この設問の正答率の低さの理由がこの仮説通りだとすると，これまでの設問の修正案で述べてきた問題の分量の削減方法によって，世界史 B の問題全体の字数を減らすことが先

決となる。そのうえで，この設問の分量削減のために，まず資料 2 を削除する。次に，問 1 の設問文を，資料 1 の「余はもはや党はなるものを知らぬ」の意味と，第一次世界大戦の終了時のドイツの状況として適切な組み合わせを選びなさい,という趣旨に修正すれば,会話という設定の必要がなくなる。これで会話文すべてを削除できるから，約 400 字の削減となる。会話文と問 2 と問 3 との関係は後述する。

問 2　下線部①に関連して，第一次世界大戦の結果として定まったヨーロッパの国境を表した地図として適当なものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

下線部①とは 2 人の高校生の会話文中の「戦争が終わる」である。その前には「資料 3 の反乱が全国に広がって」とあるが,資料 3 の内容自体はこの設問の解答に無関係である。

【出題の妥当性】

第一次世界大戦の戦後処理によって，ドイツ帝国，オーストリア=ハンガリー帝国，ロシア帝国の 3 カ国の領域から，フィンランド，バルト 3 国，ポーランド，チェコスロヴァキア，ハンガリー，ユーゴスラビアの独立が認められた。この知識を基礎として 4 つの地図を見ると，①はバルカン地域がセルビア，ルーマニア，ブルガリア，ギリシアなどに分かれているから，20 世紀初めの第 2 次バルカン戦争後と思われる。

②はチェコスロヴァキアが 2 カ国に分かれ，ユーゴスラビアも 7 カ国に分かれているから，現在のヨーロッパであろう。③は，イタリア地域がいくつかに分割され，それ以外の地域が，フランス，神聖ローマ帝国，ポーランド王国，ハンガリー王国，オスマン帝国などに分割されていた 18 世紀半ばの国境と思われる。④が第一次世界大戦の結果を示す国境である。

第一次世界大戦の戦後処理によって，ヨーロッパの勢力図は大きく変化したのであるから，入試問題として出題することは妥当である。戦後処理の内容を地図選択問題として問うことも，各講和条約の知識を基礎として思考力・判断力を評価しようとする意図が読み取れ，良問といえる。正答率は 57.6%であるから，史実の知識と地図の読み取りの複合問題としては妥当な水準で，選抜機能も有効だろう。

【修正案】

この設問を良問と評価したうえで，より視野を広げるための修正案を提案しておこう。戦後処理をヨーロッパ地域だけに限定せず，第二次世界大戦につながる問題点や，さらに現代の国境問題や民族問題などにつながる問題点を内包していたことを示唆する出題であ

る。ドイツの賠償問題，国内の混乱と改革，経済的困難，オスマン帝国の解体から中東諸国の独立，パレスチナ問題の原点としてのイギリス外交，国際連盟の創設およびワシントン体制とその限界，などが論点として挙げられよう。また，そこから派生させ，大戦の影響として，ロシア革命とソビエト連邦の成立，アメリカの債権国化と経済発展および世界恐慌をとりあげることも可能である(経済学部の過去の入試で出題済み)。

これらの論点(のいくつか)から構成される歴史的ストーリーを作成し，それを要約したリード文を提示して，論点に関する小問を配置した大問とするのである。そうすれば，問 1 のダミー選択肢として示された史実を出題することもできるから，資料 1 も必要でなくなる。次の問 3 の内容もこの大問に取り込めば，下線部②も削除可能だから，会話文全体も不要になる。すでに指摘したように，資料 2 と資料 3 も不要だから，大問のリード文を簡潔なものとすれば，大幅に字数を削減できるのである。

問 3　下線部②に関連して，当時のアメリカ社会について述べた文 a・b と，その様子を表した写真あ・いとの組合せとして正しいものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

下線部②は，会話文の「この戦争で……アメリカ合衆国が発言力を増すようになった」である。a・b の文章の中で正誤判断のレファレンスは，a がアウトバーン建設と軍需工業拡張，b が自動車や家電製品の大量生産である。あの写真は，出荷待ちと思われる多数の自動車(おそらくフォード T 型)，いの写真は，多数の箱状のものを積み上げて遊ぶ子どもたちである。箱状のものが何かは写真からは読み取れないが，教科書掲載の写真の説明では，ドイツの激しいインフレでほとんど無価値になった紙幣の束である。

【出題の妥当性】

正誤判断のレファレンスから，a がドイツで，b がアメリカであると判断するのは容易であろう。これがわかれば自動車の写真がアメリカであることも自明である。したがって，難易度はかなり低く，全員正解でも不思議ではないが，正答率は 77.6%にとどまっている。その理由は問 1 で指摘した，試験時間に比べての問題の分量の多さに起因するのではないか。充分な時間が与えられれば，無解答率は低くなって正答率はもっと高くなり，高偏差値の大学でなくてもこの設問の選抜能力はないに等しいであろう。

【修正案】

設問文の「下線部②に関連して，」を「第一次世界大戦で，国際社会におけるアメリカ合衆国の発言力が増すことになった。」に修正すれば，会話文は不必要となり，この設問

の字数を削減できる。ただし，この設問の素材をこのまま生かしながら，選抜機能を確保するのは難しい。1 つの方法は，a・b のキーワードに関する設問を，問 2 で提案した修正案の中に取り込むことである。

もう 1 つの方法は，この設問のように写真と状況の組合せでなく，**あ・い**の写真を提示して，それぞれの写真の背景となった両国の状況を正誤判断させる 2 つの設問にすることである。ドイツについては，箱状のものが札束であるという説明付きで**あ**の写真を提示し，インフレーション，レンテンマルク，ドイツ賠償の緩和策としてのドーズ案の内容などについての誤文選択問題とする。アメリカについては，**い**の写真を提示して，債権国への転化，自動車の大量生産方式，家電製品の普及として具体的な品目，1920 年代の共和党の政策などについての誤文選択問題とする。こうした設問であれば，受験生の知識と思考力・判断力を評価しつつ，充分な選抜機能を実現できるだろう。

B「第一次世界大戦中の外交」についての設問

B の設問文は，「次の資料は，いずれも第一次世界大戦中の外交に関するものである」で，資料 4 として約 400 字の文章，資料 5 として約 250 字の文章が提示されている。資料 4 には「メッカのシャリーフ」や「アラブ人の独立を認め」という文言があるから，フサイン・マクマホン往復書簡(協定)の抜粋である。資料 5 には「パレスチナにおいてユダヤ人の民族的郷土を設立」という文言があり，さらに末尾には「アーサー＝ジェームズ＝バルフォア」という署名があるから，バルフォア宣言の抜粋である。

問 4 (1)　資料 4 と資料 5 は，相互に矛盾があるため，紛争の原因となったものである。資料 4 または資料 5 について述べた文として適当なものを，次の①～⑥のうちから一つ選べ。なお，適当なものは複数あるが，解答は一つでよい。

(2)　(1)で選んだ答えと最も関連が深い事柄について述べた文を，次の①～⑥のうちから一つ選べ。

(1)の選択肢は，①～③が資料 4 についてで，イギリスの交渉相手と交渉の目的が正誤判断の基準となっている。レファレンスは，①がオスマン帝国，トルコ人保護，②がアラブ人勢力，アラブ人国家の独立，③がフランス，オスマン帝国領の処理でロシアの排除，である。④～⑥は資料 5 についてで，この宣言の 2 つの主体(および客体)が正誤判断の基準となっている。④は英米の共同宣言，⑤はフランス政府→ユダヤ人，⑥はイギリス政府→ユダヤ人，である。

(2)の選択肢は，①がイスラーム同盟(サレカット=イスラム)の結成，②がイスラエルの建国，③がマラヤ連邦の独立，④がスエズ運河の国有化宣言，⑤がイラク王国の独立，⑥がパフレヴィー朝の樹立，である。

【出題の妥当性】

第 2 問 A の問 1 の【修正案】で指摘したが，フサイン=マクマホン往復書簡とバルフォア宣言は，現在のパレスチナ問題の原点といえるイギリスの外交文書である。これらを出題することは，現代の問題を世界史的視野から考えるための必要不可欠な知識を問うという意味で，非常に有意義である。ただし，この設問に解答するためには，2 つの文書の意味や両者の内容の矛盾が紛争の原因になったことを知っている必要はない。

(1)の資料 4 の選択肢については，この資料がフサイン=マクマホン往復書簡であることを知らなくても，資料にイギリスが「アラブ人の独立を認め，それを支援する用意がある」という記述があるから，②が正しいと判断できる。資料 5 の選択肢については，末尾に「アーサー=ジェームス=バルフォア」の署名があり，バルフォア宣言であることがわかる。この宣言の内容をを知らなかったとしても，「国王陛下の政府は」が主語となっているから④の英米の共同宣言は排除され，署名からフランス人ではないと推測できるから，⑥が正しいと判断できる。

(2)の選択肢①の「イスラーム同盟」は(イスラームと表記するなら，カッコ内も「サレカット=イスラーム」と表記すべきである)は，ジャワで 1911 年に結成された民族運動団体であるから，資料 4，5 との関連はない。②のイスラエルの建国は 1948 年で，1947 年のパレスチナ分割に関する国連総会決議を受け，イギリスの委任統治終了とともにユダヤ人が宣言した。③のマラヤ連邦の独立はアラブ人ともユダヤ人とも無関係である。④のスエズ運河の国有化宣言は，1956 年 7 月にエジプトのナセル大統領が宣言したもので，同年 10 月にイスラエル・イギリス・フランスがエジプトを攻撃してスエズ戦争(第 2 次中東戦争)となった。⑤のイラク王国の独立は 1932 年で，イギリスの委任統治から独立した。⑥のパフレヴィー朝はイランの王朝であるから資料 4，5 との関連はない。

この設問は(1)の正解が 2 つで，(2)では(1)で選択した解答との関連する史実を選択させるという新しい出題形式である。正解は，(1)で②と答えた場合の(2)は⑤，(1)で⑥と答えた場合の(2)は②とされている。

(1)の難易度はかなり低く，正答率は 78.7%と高水準である。この設問の資料の分量は計 650 字と多いから，第 5 問 A の問 1 で指摘したように，時間不足による無解答および受験

生が資料をきちんと読まずに「ヤマカン」で解答用紙にマークするという行動をとった可能性がある。このことを考慮すると，充分な試験時間または試験時間に応じた問題分量であった場合，正答率はもっと高くなり，高偏差値の大学でなくてもこの設問が選抜機能をもたない可能性が高い。

(2)の正答率は 43.0%と，この設問の難易度の低さにしては低水準である。『プレテストの結果報告』によると，解答の組合せ⑥・②が 35.0%，②・⑤が 8.0%である。(1)は史実の知識がなくても正解できるが，(2)は選択肢の史実の知識が必要であるし，受験生が新しい出題形式に戸惑った結果がこの正答率だった可能性がある。また，(1)が正答でないと(2)も正答とならないから，(1)の正答率を考慮すると，(2)の実質的な正答率は約 55%となる。

また，設問文の冒頭には，「資料 4 と資料 5 は，相互に矛盾があるため，紛争の原因となったものである」という文章があるが，「紛争」は一般的過ぎて曖昧である。「中東地域の紛争」とすると解答のヒントになるとの考えからかもしれないが，(1)の正答率の高さを考慮すると，第一次世界大戦中の列強の外交政策が中東・パレスチナ問題の発端となっていることを明示しても，正答率にはほとんど影響はなかったと思われる。

【修正案】

世界史を学ぶことは，現代の問題の背景や原点を知り，問題の本質や解決の方向性を，世界史的視野から考えるための前提となる，というメッセージを発信できる修正案を提案しよう。

この設問は，資料としてフサイン=マクマホン往復書簡とバルフォア宣言を提示し，しかも設問文で 2 つの文書の矛盾が「紛争の原因となった」と述べているのだから，現在の中東問題やパレスチナ問題を視野に入れた歴史的ストーリーを問う設問としたい。2 つの文書の矛盾の内容，英・仏・露間のサイクス=ピコ協定，第二次世界大戦後の国連総会のパレスチナ分割決議とイスラエル建国，4 次にわたる中東戦争などは，教科書に豊富な記述がある論点である。さらには 9.11 同時多発テロ以降のアフガニスタン戦争・イラク戦争も，教科書に基づいて出題可能である(これらは経済学部の過去の入試で複数回出題済み)。

問 5　下線部③に関連して，ユダヤ教について述べた文として適当なものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

下線部③とは，バルフォア宣言からの引用文中の「ユダヤ人」である。

① 火を尊び，善悪二元論を唱えた。

②『旧約聖書』と『新約聖書』を聖典としている。

③ 輪廻転生の考え方に立ち，そこからの解脱を説いた。

④ 神によって選ばれた民として救済されるという，選民思想を持つ。

【出題の妥当性】

4 つの選択肢に当てはまる宗教を，教科書の記述から判断すると，①はゾロアスター教，②はキリスト教，③は仏教，④はユダヤ教である。したがって，④が正解となる。しかし，これらの宗教を信仰する人たちがこの説明を見てどう感じるだろうか。

例えば，①の「火を尊び」は，ゾロアスター教(拝火教)だけでなく，多くの宗教が「火」に神秘的で超自然的な力を見出し，神聖なものとみなしているのではないか。宗教の違いを問わず，死者の霊にロウソクの火やかがり火を捧げたり，火を修行のために用いたりするのは，よく知られていることである。「善悪二元論」にしても，神と悪魔や天国と地獄の対立の図式，あるいは心の中の善と悪の葛藤の超克も，多くの宗教にみられる教えであろう。

また，2001 年の 9.11 同時多発テロ後には，ブッシュ大統領がアメリカ＝善，テロリスト＝悪という善悪二元論にたって，世界に対して「我々の側につくか，テロリストの側につくか」とせまって「対テロ戦争」の開始を宣言した。これもブッシュ大統領の宗教的なバックグランドに基づくか，あるいは宗教の違いを超えて，世界中の人々に理解しやすいレトリックを使用したとも考えられる。

この設問は，各宗教の特徴を単純化して正誤判断させることによって，火に神秘的な力を見出したり，世の中を善と悪との対抗とみなしたりするのは，ゾロアスター教だけなのか，あるいは仏教において解脱すべき対象は「輪廻転生」だけなのか，などと受験生が疑問にもつことを排除しているのである。こうした疑問をもち，宗教には多面性・多義性があることを考えるきっかけを与えることこそが「改革」の理念なのではないか。この設問は，第 3 問 A 問 3 の「ロマン主義」の説明を選択させる問題と同様に，受験生に対して，これらの宗教の説明に疑問をもつことや考えることなく，ただ無批判に暗記すればよいというメッセージを発信しているのである。

問 4 では，2 つの資料をもとにして，イギリスの外交政策が「紛争の原因」となったことを指摘して，思考力・判断力を求める意図が感じられる出題をしているのに，この問 5 では知識の暗記だけを問う設問としたのはなぜなのか。「改革」の理念を具体化しようとする意図がまったく感じられない設問である。しかも，正答率は世界史 B の全問題中でもっ

とも高い 79.5%である。この設問の意義は，このような単純な暗記問題は選抜機能をもたないことを明らかにしたことだけである。

問 4 でフサイン=マクマホン往復書簡とバルフォア宣言を提示し，イスラエル建国を選択肢の 1 つとしているのだから，この問 5 ではパレスチナ問題について出題すべきであった。出題者がユダヤ教の設問にしたのは，パレスチナ難民が発生・増加して，現在もパレスチナ人が過酷な状況に置かれているのは，ユダヤ教の選民思想が根底にあるというメッセージなのだろうか。

【修正案】

問 4 で現代のパレスチナ問題につながる論点を出題したのであるから，問 5 は当然それに関連する論点を提示し，受験生の思考力・判断力を評価できるような出題をすべきである。資料 5 を素材とするなら，「ユダヤ人」を下線部とするのではなく，バルフォア宣言の末尾にある「シオニスト」についての設問とすべきであろう。あるいは，この宣言にある「パレスチナに現存する非ユダヤ人諸コミュニティの……諸権利……が決して侵害するような行為がなされるべきでない」という文言を下線部として，第二次世界大戦後に多数のパレスチナ難民が発生した経緯を問う出題も考えられるだろう(経済学部の過去の入試で出題済み)。

第 6 問 「近代オリンピックと世界史のつながり」をテーマとする設問

第 6 問の設問文は「あるクラスの世界史の授業で，近代オリンピックについてまとめた次のグラフにしたがって班別学習が行われ，各班がオリンピックと世界史とのつながりを発表した。それぞれの班の発表に関連した下の問い(問 1～6)に答えよ」である。グラフは，1896 年のアテネ大会から 2016 年のリオデジャネイロ大会までの，参加選手数の推移の折れ線グラフである。

問 1　小笠原さんの班では，グラフ中の A に注目し，近代オリンピックのモデルとなった，古代ギリシアのオリンピアの祭典について調べた。この祭典の説明として適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

「グラフ中の A」とは第 1 回アテネ大会である。選択肢は，① アメン＝ラー神が崇拝された，② コロッセウムと称される円形闘技場で開催された，③ バラモンが祭儀を司った，④ デルフォイの神託と並んで重視された，である。

【出題の妥当性】

①の「アメン＝ラー神」はエジプトで信仰された神である。アメンは古代エジプト中王国以降の首都であるテーベの守護神，ラーは太陽神で，古王国時代のファラオはラーの化身として崇められた。②はローマ帝国の円形闘技場である。③はインドに定住したアーリヤ人社会の身分制度であるヴァルナの最上位で，司祭階層を指す。④はギリシア中部地域のデルフォイにあるアポロン神殿に，ポリスの指導者などが，巫女によって伝えられる神託を求めて集まった。したがって正解は④である。

古代の各国・地域についての知識の有無を問う単純な暗記問題であるが，正解の④の「重視された」という表現は，重視の理由や目的がなく意味が不明確である。教科書の叙述を参考にすると，古代ギリシアではポリス間の対立・抗争の中でも同一民族としての意識を共有するものとして重視された，という趣旨である。他の 3 つの選択肢の誤りが明白なので，正文選択問題としては成立しているが，入試問題としての完成度は低い。

単純な暗記問題で難易度は低いにもかかわらず，正答率は 56.3%と高くないし，この設問を含む第 6 問の無解答率は第 5 問の 2 倍以上となっている。これは，第 5 問 A の問 1 で指摘したように，問題分量の多さが原因で，第 6 問に取り組むまでに時間切れとなった受験生が多かったこと，無解答を避けるために，問題を熟読せずにヤマカンで解答したことが主な理由ではないだろうか。

【修正案】

「改革」の理念を具体化するのであれば，問題の分量を削減して受験生が考えて解答する余裕を与えることの他に，この設問を誤文選択問題として，デルフォイの神託の意味，ポリスの性格や身分制度，対外関係などについて問うのが適切であろう。あるいは，近代オリンピック運動が始まった 19 世紀後半には，資本主義の発達と世界への拡大を背景として,国際社会と呼べるものが形成されていったことについて出題するという方法もある。トピックとしては，万国博覧会の開催，国際赤十字社の設立，万国郵便連合の結成，労働運動の国際化として第1,第2インターナショナルの結成などをとりあげることができる。

この設問も班別学習の設定は無意味だから，設問文を，「グラフ中の A に関連して，古代ギリシアのオリンピアの祭典の説明として，もっとも適切なものを次の①～④の中から 1 つ選びなさい」に修正する。

問 2　石井さんの班では，グラフ中の B のオリンピックの参加者が少ない点に注目し，理由を考えた。考えられる理由について述べた文として適当なものを，次の①～⑥のうちか

ら二つ選べ。

「グラフ中の B」とは 1932 年のロサンゼルス大会である。選択肢は，① カトリックとプロテスタントの対立から戦争が起こった,② ヨーロッパ諸国の選手にとって大陸間移動が容易ではなかった，③ 同じ時期に第 1 回万国博覧会が開催されていた，④ ビキニ環礁で行われた水爆実験に対して反対運動が広がった,⑤ 世界恐慌の影響によって多くの国が経済不況に陥った，⑥ 環境問題が深刻化し二酸化炭素の排出量が規制された，である。

【出題の妥当性】

選択肢の中の史実を確認しておこう。①の宗教戦争は 17 世紀までと考えられ，教科書には 1932 年時点に該当する宗教戦争の記述はない。③の第 1 回万国博覧会は 1851 年にロンドンで開催されたという記述が東書と帝書の欄外注にある。④のビキニ水爆実験は 1954 年で，日本の第五福竜丸が被曝した。核兵器の登場が第二次世界大戦末期であることは，ヒロシマ・ナガサキを経験した日本の高校生が当然知っているべき知識である。⑤は 1929 年にアメリカで発生した恐慌が世界に拡大し，各国の恐慌対策が国際間の対立を深めて，第二次世界大戦の原因の 1 つとなった。⑥は世界的な規制と解釈すると，教科書の記述は薄いが，1997 年の気候変動枠組み条約第 3 回締約国会議における，京都議定書の採択を指すと思われる。

正解は②「ヨーロッパ諸国の選手にとって，大陸間の移動が困難だったため」と，⑤「世界恐慌の影響によって，多くの国が経済不況に陥ったため」とされ，両方正解で得点を与えることになっている。この 2 つ以外はロサンゼルス大会とは時期が異なる史実であるから，消去法で解答可能である。ただし，この設問の正答率は 36.1%とかなり低い。この原因は，これまで述べた問題の分量の多さに加えて，次の 3 つの問題点が存在するからではないだろうか。

第 1 に，設問が指定する正誤判断の基準は「考えられる理由について述べた文として」で，「考えられる」の主語がないことである。その前の文は「石井さんの班は……理由を考えた」だから，常識的には「石井さんの班」が主語であろう。そうすると，判断基準は「石井さんの班が考えることができる理由」として適当か否か，または「石井さんの班が理由として考える可能性がある文」として適当か否かとなる。どちらにしても，「石井さんの班」の考えしだいだから，受験生の正誤判断にはなじまない。

第 2 は，正誤判断の基準は「参加者が少ない」理由の客観的・論理的な推測だと解釈して解答しようとした場合についてである。選択肢の中の史実を確認しておこう。

①の宗教戦争は 17 世紀までと考えられ，教科書には 1932 年時点に該当する宗教戦争の記述はない。③の第 1 回万国博覧会は 1851 年にロンドンで開催されたという記述が東書と帝書の欄外注にある。④のビキニ水爆実験は 1954 年で，日本の第五福竜丸が被曝した。⑤の世界恐慌は 1929 年に始まり，各国の恐慌対策が国際間の対立を深めて，第二次世界大戦の原因の 1 つとなった。⑥は世界的な規制と解釈すると，教科書の記述は薄いが，1997 年の気候変動枠組み条約第 3 回締約国会議における，京都議定書の採択を指すと思われる。

正解は②と⑤とされ，両方正解で得点を与えることになっている。この 2 つ以外はロサンゼルス大会とは時期が異なる史実で，消去法で解答可能であるから，入試問題として成立はしている。ただし，プレテストは「改革」の理念の具体化として，思考力・判断力を問う目的があるはずである。この目的からすれば，消去法で解答できるだけでは不充分で，客観的・論理的に②と⑤の仮説が成立している必要がある。

設問の要求は，ロサンゼルス大会の参加者が少ない理由として成立する仮説を選択することである。参加者が多いか少ないかの判断基準は 2 つありうる。1 つめの基準は，前後の大会の参加者数との比較である。グラフを読み取ると，直前の 1928 年のアムステルダム大会の参加選手が 3,000 人弱，直後のベルリン大会は約 4,000 人で，ロサンゼルス大会は 1,800 人弱だから，たしかにロサンゼルス大会の参加者は「少ない」と判断できる。

2 つめの基準は，ロサンゼルス大会と同じアメリカ大陸で開催された大会との比較である。選択肢②の「大陸間の移動が容易ではなかった」の適否の判断には，前後の大会との比較だけではなく，「大陸間の移動」という同じ条件の大会と比べる必要がある。この基準に従うと，1904 年のセントルイス大会が約 800 人だから，ロサンゼルス大会は約 1,000 人増加しているのである。したがって，「大陸間の移動」は「参加者が少ない」理由にはならない，と判断することも可能である。

つまり，選択肢②は，史実で正誤判断をすることはできないし，参加者の多少を判断する基準の取り方しだいで正誤が逆転する推測にすぎないのである。このような推測をあえて正誤問題として出題する意図は，おそらく受験生の思考力・判断力を問うということなのだろう。

たしかに，受験生が，ヨーロッパからアメリカ大陸に移動するのは容易ではないだろう，だから前後の大会に比べて，参加者が少なくなったのだろうと推測するためには，思考力・判断力が必要とされる。一方で，大陸間移動という同じ条件を設定して，セントルイス大会よりは多いのだから，これは理由にならないと推論するためにも思考力・判断力が必要

である。出題者が前者の推論能力を評価し，後者の推論能力を排除する理由は何なのだろうか。

この問題点は，設問の要求を「前回大会よりも少なくなった理由」という趣旨にすれば解決できる。しかし，⑤の選択肢については，その内容に不備があるために，正解とするのは不適切である。経済学的にみると，世界恐慌とは，1929 年にアメリカで始まった恐慌が世界に波及して，各国が不況に陥った状況である。つまり，「多くの国が経済不況に陥った」ことを「世界恐慌」と呼んでいるのだから，この選択肢の文は経済学的に誤っている。したがって，経済学的な思考力がある受験生であれば，この選択肢は誤りだと判断するかもしれないし，その判断は間違っていない。これら 2 つの問題点を合わせると，この設問には正解がない出題ミスである。

【修正案】

ロサンゼルス大会の参加者が直前の大会よりも少なくなった理由として妥当な推測は，世界恐慌の影響によって，ヨーロッパ諸国が多数の選手団をアメリカに派遣する費用を捻出することが困難だったから，またはヨーロッパ諸国の多数の選手がアメリカ大陸に移動する費用を負担することが困難だったから，であろう。これを答えさせるのであれば，設問文は，「ロサンゼルス大会の参加者が直前の大会よりも少なくなった理由を推測した場合，もっとも妥当な推測を次の①～④から 1 つ選びなさい」とするのが適切であろう。

ただし，このように修正しても，推測が妥当かどうかの判断という曖昧さが残る。そこでプレテストで多用されている AL の設定を用いた修正案を提案しよう。「大陸間の移動が困難だったため」という推測についての質疑応答または討論という設定にするのである。この期間には飛行船や飛行機による大西洋横断航空路が開設されているから，戦間期の大陸間の移動手段の急速な発達，その要因となった大戦中の総力戦の下での兵器の開発や新兵器の登場，などの史実を討論の素材とすることが可能であろう。もちろん世界恐慌とその影響も重要なトピックである。

出題形式としては，史実や因果関係，時系列的関係を判断基準として，討論の論理的妥当性を問う誤文選択問題が適切であろう。このような内容および出題形式の設問とすれば，歴史を対象とした思考や適切な判断のためには，史実についての正確な知識と理解も不可欠であるというメッセージを発信できるだろう。

問 3　伊藤さんの班は，グラフ中の C の期間にオリンピックが開催されなかった理由につ

いて,戦争が起こったためだと結論づけ,その戦争に関連する国際情勢を説明するために,資料を用意した。その資料として適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

「グラフ中の C の期間」とは,1936 年ベルリン大会と 1948 年ロンドン大会の間である。資料は説明付きの図版で，どれも教科書に掲載されているようなイラストである。説明だけを引用すると,①は「バルカン問題」,②は「できることなら,私は惑星も併合したい」,③は「朝鮮という魚を狙う三国」，④は「ハネムーンはいつまで続くのか」である。

【出題の妥当性】

①のバルカン問題は，第一次世界大戦前の問題である。これは列強の利害や宗教・民族問題が複雑に絡み合った問題で，バルカン半島は「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれた。

②は，ケープ植民地首相のセシル=ローズの姿を描いた図版で，すべての教科書に掲載されている。説明文は彼の言葉とされているが，教科書には記述がないので，図版だけで判別するのはかなり難しい。

③は，19 世紀末の朝鮮をめぐる日中露の争いである。図版はビゴーの描いた風刺画「漁夫の利」で，これは日本史の教科書にしか出てこないが，説明文で判別可能である。

④の「ハネムーン」は，図版を見ると，ハーケンクロイツを飾ったチョビ髭の新郎と，鼻髭でオールバックの髪型の新婦のイラストである。このイラストが掲載されているのは東書だけであるが，2 人の特徴からヒトラーとスターリンの結婚を描いたものと判別可能なので，1939 年の独ソ不可侵条約の風刺画と解釈できる。

以上の図版と説明を読み解くことができれば，④が正解と判断できる。正答率は 49.7%であるから，②の判別が難しかったのであろう。問題の分量の多さを考慮すれば，正答率はもう少し高くなり，適度な選別機能をもった可能性がある。史実についての正確な知識と理解を基礎として，図版や説明から正解を導くために思考力・判断力が必要となる設問であるから，「改革」の理念を具体化しようとした良問として評価できる。

【修正案】

この時期にオリンピックが開催されなかったのは，いうまでもなく第二次世界大戦が原因であるから，時期の異なる図版をダミーとするのではなく，この大戦の経過を示す図版の並べ替え問題とすることも考えられる。例えば，④の図版の他に，教科書の多くに掲載されていて受験生が知っておくべき図版として，ノルマンディー上陸作戦，ヤルタ会談，広島への原爆投下などが適切であろう。この設問のウェートを大きくするなら，ヤルタ会談の図版に関連づけて，戦後処理のための連合国軍側が行なった何回かの会談や発表され

た宣言について，資料を提示した問題や誤文選択問題の出題も考えられる。

この設問も班別学習の設定は無意味だから，設問文を，「グラフ中の C の期間は第二次世界大戦のためにオリンピックが開催されなかった。第二次世界大戦開始直前の時期の国際情勢に関連する資料として，もっとも適切なものを次の①～④の中から 1 つ選びなさい」に修正する。

問 4　鹿島さんの班は，グラフ中の D のオリンピックを調べるうちに，アフリカ系アメリカ人の選手が人種差別に抗議する姿勢をとった表彰式の写真を見つけた。アメリカ合衆国における人種問題について述べた次の文 a と b の正誤の組合せとして正しいものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

「グラフ中の D」とは，1968 年のメキシコシティ大会で，「表彰式の写真」とは，陸上競技男子 200m の表彰式で，2 人の選手が下を向き，黒い手袋をはめた握りこぶしを突き上げた写真である。

a　リンカン大統領による奴隷解放宣言の結果，南北戦争が勃発した。

b　キング牧師が，黒人差別撤廃を求める公民権運動を指導した。

選択肢は a と b の正誤の組合せで 4 種類である。

【出題の妥当性】

奴隷解放宣言は 1863 年で，南北戦争は 1861～65 年であるから，a は誤りである。b のキング牧師の公民権運動の指導はもちろん正しい。どちらもアメリカにおける人種差別問題の常識ともいえる基本的知識であり，入試問題として出題することは適切である。また，2 人の選手について，「黒人」選手ではなく，「アフリカ系アメリカ人」選手としているのも出題者の見識を示している。

それだけに，オリンピックの表彰式での 2 人の選手のブラックパワー・サリュートと呼ばれる抗議姿勢の写真を提示して，アメリカの人種差別をテーマとして出題しながら，a と b の正誤だけを問うのは疑問が残るし，もったいない。写真は「人種問題」を出題する道具として使われているだけだからである。受験生が解答するためには，奴隷解放宣言と南北戦争の時系列関係の知識さえあればよいから，たんなる年代と事項の暗記を問う設問でしかない。

メダルを獲得した選手の歓喜の場であるはずのオリンピックの表彰式で，2 人の選手が抗議姿勢をとった背景には何があったのか。奴隷解放宣言から 100 年以上も経ってなお，

表彰式で抗議しなければならないとメダリストに決断させた，アメリカの人種差別問題とはどんな問題なのか。これらを受験生に考えさせる出題，あるいは受験した後にもこの抗議の背景や意味を調べたいという気にさせる出題，つまり，高校生に現代社会の諸問題に対する問題意識を育む内容の出題が望ましかった。キング牧師の公民権運動を問うならなおさらである。

【修正案】

ブラックパワー・サリュートの背景と意味を問うことのできる出題のために，例えば，次のような出来事を織り込んだリード文を作成する。AL の班別学習の設定が必要なら，先生のコメントやアドバイスによって，2 人の選手の抗議姿勢の背景を調べさせることにすればよい。

1968 年にメキシコシティで開催されたオリンピック大会の陸上競技の表彰式で，2 人の A<u>アフリカ系アメリカ人</u>選手が，国歌の演奏と国旗掲揚中に下を向き，黒い手袋をはめた握りこぶしを突き上げた。この行動はブラックパワー・サリュートと呼ばれるが，その背景には，アメリカの B<u>人種差別</u>撤廃のために，公民権運動に取り組んだ［ア］が暗殺された事件がある。

［ア］が本格的に公民権運動に取り組むのは，アラバマ州モントゴメリーで 1955 年に始まったバス・ボイコット運動である。この運動は，当時の市営バス車内の座席は白人用と黒人用に分けられており，黒人女性が白人用座席に座って白人に席を譲らなかったことで逮捕された事件をきっかけとしている。1 年余りの運動の結果，公共交通機関における差別待遇は違憲という最高裁判決を勝ち取った。

［ア］は，［イ］から 100 年経った C<u>1963 年のワシントン大行進</u>で，［ウ］というフレーズが繰り返される有名な演説を行なった。1965 年にアメリカが D<u>ベトナムへの軍事介入</u>を本格化させると，彼はベトナム反戦運動にも関わるようになる。しかし，E<u>ベトナムとの和平交渉</u>が本格化する前の 1968 年 4 月，遊説先のテネシー州メンフィスで暗殺された。2 人の選手のブラックパワー・サリュートは，その半年後の 10 月に行なわれたのである。

このような趣旨のリード文に上記のような空欄や下線部を作れば，人種差別をテーマとした歴史的ストーリーのもとに，さまざまな史実について出題することができる。このストーリーの素材となる史実は教科書に豊富な記述がある。

問 5　高山さんの班は，グラフ中のＥのオリンピックの参加選手数が減少したのは，冷戦期のアフガニスタン侵攻が原因だと知った。冷戦について述べた文として適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

「グラフ中の E」とは，1980 年のモスクワ大会である。選択肢の正誤判断の基準となるレファレンスは，①チャーチルの「鉄のカーテン」演説，②ソ連が「封じ込め政策」を採った，③ソ連は「プラハの春」による自由化を支持した，④スターリン批判によって東西関係が緊張した，である。

【出題の妥当性】

選択肢の史実を確認しておこう。

①のチャーチルの「鉄のカーテン」演説とは，イギリスのチャーチル元首相が 1946 年 3 月に行なった演説で，東欧諸国が次々と社会主義国家となりソ連圏が拡大しつつあることに対して，ソ連がバルト海からアドリア海まで「鉄のカーテン」をおろしていると，ソ連の閉鎖性を批判した。

②の「封じ込め政策」は，トルーマン米大統領が 1947 年 3 月の「トルーマン・ドクトリン」演説で提唱した冷戦戦略を具体化するもので，西欧諸国への軍事・経済援助によって，ソ連圏を封じ込める政策である。この政策の 1 つがヨーロッパ復興計画の「マーシャル・プラン」である。

③の「プラハの春」は，1968 年にチェコスロヴァキアのドプチェク政権が進めた，市民的自由の拡大や市場経済の導入などを内容とする民主化改革である。ソ連は陣営内に民主化の動きが波及することを恐れて，ワルシャワ条約機構の 4 カ国軍とともに軍隊を派遣して，改革を弾圧した。

④の「スターリン批判」は，1956 年の第 20 回ソ連共産党大会で，フルシチョフ第一書記が，スターリンは個人崇拝に基づいて市民の権利を侵害し，残忍な弾圧によって多数の無実の者を処刑したと批判したことを指す。フルシチョフは，1953 年のスターリン死去後に第一書記となり，外交政策を西側との平和共存・東西の緊張緩和路線に転換し，1959 年に訪米してアイゼンハワー大統領と会談した。

以上から，②～④は史実と全く逆なので，①が正解となるのだが，正誤判断問題としては誤りの作り方がかなり安易である。これらのキーワードは米ソ冷戦前半期のごく基本的な知識であるから，難易度はかなり低い。正答率は 61.5%であるが，これまでも指摘してきた無解答率の高さと問題分量の多さの問題を考慮すると，受験生に時間的余裕があれば

正答率はかなり高くなって，選抜機能をほとんど期待できない設問である。

米ソ冷戦は，第二次世界大戦後の世界を規定した重要な要素であるから，出題すること自体はきわめて有意義である。ただし，正解とされている①の「鉄のカーテン」演説についての文が，「冷戦について述べた文」という判断基準から「適当なもの」といえるかどうかは疑問である。

米ソ冷戦は，資本主義と社会主義という対照的なイデオロギーおよび経済体制間の妥協不可能な対立であるとともに，大戦末期に登場した核兵器の存在によって，この対立を米ソ間の戦争という軍事的手段によって解決することが困難となったという点に特徴がある。だからこそ，米ソの直接的な軍事衝突をともなわない対立として，「Cold War (冷たい戦争)」と呼ばれるようになったのである。この冷戦がいつから始まったのかについては，専門的研究者の間でも議論がある論点である。

米ソ対立という点だけをみれば，大戦末期の戦後処理をめぐる交渉において，対立はすでに顕在化しはじめていたし，対日戦での原爆投下は「ロシアとの冷たい外交戦争の最初の大作戦の一つであった」(P.M.S. Blackett)という見解もある。一方，米ソは連合国として協力関係にあったし，アメリカによる対ソ援助は大戦終了後もしばらくは継続していた。

チャーチルの「鉄のカーテン」演説は，対独戦終了から 10 カ月，対日戦終了から 7 カ月という，かなり早い段階で行なわれたもので，内容はソ連の勢力範囲の拡大に対する不信感を表明したものである。ソ連の勢力範囲の拡大も，この時点では，ナチスドイツに侵略された経験(およびロシア革命後の対ソ干渉戦争の経験)から，自国の安全保障の確保が主目的であったと考えられる。

したがって，「鉄のカーテン」演説を，上述のような性格をもつ冷戦に関連づけて，入試問題の正誤判断問題として出題するのは適切ではない。冷戦とは何なのか，いつ始まったのか，「鉄のカーテン」演説の意味は何か，冷戦の一環といえるのか，これらは専門的研究者の間でも議論のある論点である。

チャーチルの「鉄のカーテン」演説を明確に冷戦の一環として説明した教科書はない。そうした議論があることを認識しているからであろう。にもかかわらず，①を正解とすることは，専門家間でも議論のある論点について，出題者の私見に過ぎない解釈を，受験生に正しい解釈と受け取らせることになる。その意味で，この設問は悪問である。

【修正案】

「鉄のカーテン」演説を選択肢とするのは適切でないので削除する。また，冷戦につい

ての設問としては，正文選択にするとダミーの誤りの作成が難しいので，誤文選択問題に変更し，トルーマン・ドクトリン，マーシャル・プラン，ベルリン封鎖，北大西洋条約機構(NATO)，ワルシャワ条約機構などの説明を選択肢とするのが適切であろう。どのような誤りを作るかは難易度の設定と，出題者の見識しだいである。

その他に，冷戦における東西両陣営の勢力範囲の変化を地図問題として出題すること，封じ込め政策の軍事的な側面として，NATO の他に，中東条約機構(METO)，東南アジア条約機構(SEATO)，太平洋安全保障条約(ANZUS)，日米安全保障条約などを出題することも，冷戦を地球的規模で把握することにつながるから，「改革」の理念の具体化として適切である。また，冷戦の熱戦への転化として，朝鮮戦争やインドシナ戦争(ベトナム戦争)の出題も妥当であるし，国際連盟に代わる国際的平和維持機構として設立された国際連合が，冷戦によって充分な機能を果たせなかったことを考えさせる出題も有意義であろう(以上の修正案の内容は経済学部の過去の入試で複数回出題済み)。

問 6　中田さんの班は，グラフ中の F のオリンピックの開会式で，ブラジルの先住民が登場する場面を見て，世界史上の先住民の歴史について興味を持ち，カードにまとめた。その記述として誤っているものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

「グラフ中の F」とは，2016 年のリオデジャネイロ大会である。選択肢は「カードにまとめた」という設定から，長方形の枠で囲まれている。出題の妥当性の検討と関係するので全文引用する。

① アメリカ合衆国では，西部開拓にともなって，先住民が，ミシシッピ川以西へと強制移住させられた。

② スペインに征服される以前のインカ帝国の先住民は，縄の結び方で情報の記録や伝達を行っていた。

③ ニュージーランドは 19 世紀に植民地化され，先住民のマオリ族が，イギリスの支配下におかれた。

④ フランス革命後のラテンアメリカでは，先住民の子孫であるメスティーソが，独立運動を主導した。

【出題の妥当性】

正解は④とされている。④の文章のどこが誤りなのだろうか。受験生の立場に立って考えると，「フランス革命後のラテンアメリカでは」の部分は時期と地域を示しているだけ

で誤りはないと推測できる。そこで，メスティーソが「先住民の子孫」なのか，独立運動を主導したのかの 2 つの正誤を判断しようとするだろう。教科書の説明では，メスティーソはラテンアメリカ植民地の住民の階層の 1 つで，「先住民と白人の混血」となっている。「混血」は「子孫」ではないとすれば誤りになるが，混血であっても先住民の遺伝子を受け継いでいることに着目すれば，「先住民の子孫」を完全な誤りとは断定できない。

では，「メスティーソが独立を主導した」が，出題者の意図した誤りなのだろうか。教科書の記述を見ると，東書 W では，フランス革命後のラテンアメリカの独立運動を，フランス領，スペイン領，ポルトガル領に区別して説明している。フランス領ハイチは黒人奴隷の蜂起によって独立を達成したこと，ポルトガル領ブラジルはポルトガル王子が独立を宣言したことが説明されている。

スペイン領植民地では，「クリオーリョ(植民地生まれの白人)を中心に独立運動が本格化した」という記述のあとに，ベネズエラ，コロンビア，アルゼンチン，チリ，ペルーの独立が説明されている。そしてメキシコについては，インディオやメスティーソの蜂起をクリオーリョの現地支配層が鎮圧し，独立に踏みきったという趣旨の記述がある。

つまり，メキシコの例ではメスティーソが独立のために蜂起しているから，「メスティーソが独立を主導した」は，「主導した」の意味の解釈しだいで必ずしも誤りとはいえない。したがって，正誤判断のレファレンスは，メスティーソが「先住民の子孫」なのか，独立運動を主導したのかではない。④が誤文であるとすれば，ラテンアメリカ地域すべての独立運動を，どのような階層が「主導した」と特徴づけることはできないから，という理由になる。

これが出題者の意図だったのだろうか。そうだとしたら，④の文章は，「ラテンアメリカのすべての地域で，…メスティーソが独立運動を主導した」という文章にすべきであった。これなら，フランス領やポルトガル領には当てはまらないので，誤りは明白である。原文のままでは，ラテンアメリカでは「メスティーソが独立運動を主導した」地域もあったという解釈を排除していないからである。

なお，山川にはハイチの独立もクリオーリョ主導であると解釈できる不適切な記述がある。1 社の教科書の記述だけを下敷きにして誤文選択問題を作ると，④のような不適切な選択肢や出題ミスになりかねないことに注意が必要である。

もちろん「すべての地域では」とすれば，例外はあるはずだという推測が可能で，④が誤りと判断するのが容易となる。正誤を厳密にすれば難易度が下がるが，正解なしや正解

が複数存在するといった出題ミスを避けるためには，やむを得ないのである。これが誤文選択問題の「宿命」である。教科書の叙述は，紙数の制約から，事実関係，因果関係，時系列などが曖昧となっている場合がある。それは教科書としては許容範囲であっても，誤文選択問題に利用する場合には,別の解釈が不可能な文章にしなければならないのである。受験生の学力レベルによっては，難易度が下がっても選抜機能がなくなるわけではないので，より難易度の高い問題と組み合わせることで，選抜機能のために適度な標準偏差を実現することは可能である。

誤文選択問題の「宿命」を考慮すると，正文とされている①と②にも問題点がある。①に「ミシシッピ川以西」という具体的な地域の記述があるのは，ジャクソン大統領期の強制移住法を指す意図があると思われる。しかし，「強制移住」は「強制移住法」のように固有名詞ではないから，「ミシシッピ川以西」かどうかの正誤判断は困難である。ミシシッピ川以東の地域でも，西漸運動にともなって先住民(の一部)が移住を事実上強制されていたはずである。この可能性を排除できなければ①も誤りとなり，この設問は正解が 2 つある出題ミスとなる。

②はインカ帝国のキープ(結縄)を問う問題であるが，「インカ帝国の先住民」という表現では，インカ帝国が 15 世紀末に勢力圏を拡大していった際に，近隣地域に居住していてインカ帝国に征服されたルパカ族やチャンカ族，チムー王国の人々を指すという解釈が可能である。これらの人々やその文化について，教科書には記述がないから，正誤判断は不可能である。また，「スペインに征服される以前の」という限定は，征服後にキープは消滅したか否かという事実も問うことになり，これも正誤判断不可能である。

③には他の選択肢のような問題点はない。しかし，ニュージーランドが 1840 年にイギリスの植民地になってからも，マオリと白人入植者との間で 2 度の戦争が起こっているように，イギリスの植民地統治に対してマオリの激しい抵抗があったことがまったく無視されている。

この設問の正答率は 56.6%で，無解答率は 3%以上と全問中もっとも高くなっている。問題分量の多さに加えて，上述のように，選択肢が誤文選択問題として曖昧だったことも原因かもしれない。

【修正案】

4 つの選択肢の趣旨を生かすのなら，①には「ジャクソン大統領期の強制移住法によって」を挿入する。②は「スペインに征服された当時のインカ帝国では，縄の結び方で情報

の記録や伝達を行なっていた」に修正する。③については，植民地統治に対するマオリの激しい武装闘争があったことは教科書に記述があるので，「ニュージーランドは 19 世紀にイギリスの植民地とされたが，先住民のマオリは植民地統治に対して激しい武装闘争を行なった」とする。④は「ラテンアメリカでは，植民地生まれの白人であるメスティーソの支配に対して，先住民のインディオが蜂起し，独立を勝ち取った」という誤文とする。

このように修正したとしても，史実の暗記問題というこの設問の性格は変わらない。オリンピックでブラジルの先住民が登場したことを設問のきっかけとするなら，ラテンアメリカの植民地化，先住民の置かれた状況，アメリカの独立戦争やフランス革命に影響による独立運動の高まりなどを出題した方が適切であろう。

この設問も班別学習や「カードにまとめた」という設定は無意味だから，上の修正を加えたうえで，設問文を「グラフ中の F のリオデジャネイロ大会の開会式では，ブラジルの先住民が登場した。ラテンアメリカ地域での独立運動について述べた文章として誤りを含むものを，次の①～④の中から 1 つ選びなさい」に修正する。

以上の検討結果から，このプレテスト世界史 B は，一部に思考力・判断力を必要とする良問も見られるものの，たんなる史実の暗記問題も少なくなく，正解を導くことが困難な設問，解答なしや正解が複数ある出題ミスの疑いが濃い設問，不適切または誤った理解や考え方を発信しかねない悪問がいくつも見られた。全体としては「改革」の理念の具体化に成功しているとはいえないことが明らかであろう。

共通テストや各大学の入試問題で，受験生に「考えて解く」ことを求めるのであれば，まず，設定された試験時間で解答可能なように，問題文や資料を必要最小限の内容と分量に厳選することが必要である。そのうえで，本稿の【出題の妥当性】で指摘したように，「改革」の理念の具体化という目的にかなう出題内容となっているかの検討が必要である。本稿で示した【修正案】はその参考になるはずである。もちろん，正誤判断問題では判断基準を明確に示し,想定外の複数の正解の存在や正解なしという出題ミスを避けるための，詳細なチェックも不可欠であることはいうまでもない。